

第178図 中の段出土の軒平瓦・軒丸瓦の分析グラフ

軒丸瓦

文様は、特殊なものとして五七桐文がある。串団子状の花をもち、金箔押しのものを含み、二又唐草の滴水系軒平と組み合う。また、この期に属する可能性を持つものとして、花が別表現の五七桐文をもつものがあり、沢鶴文の滴水系軒平瓦と組み合う可能性が強い。

圧倒的多数は、三巴文で、軒平瓦同様に多彩である。頭部に対して尾部が右に巻くものより、左巻きが多い。巴の外に圓線を伴ったり、巴尾部が繋がって圓線状になるものもあるが、そうでないものが多い。巴頭部がC字形のもの、巴の頭部間が詰むもの、頭部からの巻きが180°ないしはそれ以上あって尾部が長いもの、巴頭部が細いものもあるが、既に頭部が粗大なもの、巴の頭部どうしが離れるものもある。珠文数は11から23個以上まであって、振幅が大きいが、分布の中心は17・18個で、平均的には1式より減ってくる。珠文の大きさは、概して径6mm以下と小さいが、これも偏差が著しい。瓦當径は中の段では15cm台にピークがあるが、12cm台から18cm台までばらつきがあって定まっていない。瓦当の大きさに瓦窓が適合していない製品もしばしば見かけ、外周部が相当広いものも含まれる。文様区従全体のうち巴部の占める割合も偏差が著しいが、平均化した値は0.45で、3式以降より巴部径が小さく珠文部が広い。断面形は基本的に、瓦當裏の丸瓦部が深く括れるものが多い。文様面の深さは軒平瓦と同様である。

丸瓦部内面の布目は、ゴザ目状に粗いものもあるが、ガーゼ状の細かなものが圧倒的に卓越し、吊紐痕もよく見かける。

胎土・焼成など

胎土も、個体差が大きく、微粒で均質なものがあるが、粗砂粒・赤褐色粒・黒色粒を含む例が日につき、極端に砂礫を含むものもある。また、粘土の練りが不十分で、細かい単位の異色生地による流層構造が断面で観察できるものがある。焼成は火が良く通らずに軟質なものが多く、断面は芯部が暗色、表部・外側が明色の成層構造となるものが主体である。器面炭素の吸着度も1式よりもかえって悪く、灰黒色を呈するものもあるが少數かつ部分的で、概観は灰色～灰白色である。

c. 岡山城3式〔慶長5年(1600年)直後〕

中の段の第III期・第IVa期の層位に新出種として伴う資料を目安とする。要素によってはII期やIVb期の製品との差異がまだ判然としていないが、2式に対する決定的な違いは粘土板の切断時のコビキB技法の出現である。中の段の各層位から出土した瓦を単純にみるとコビキB技法の採用はIII期からIVb期ないしV期にかけての漸移的な転換に一見思えるが、古い時期からの流用品とみられる個体を取捨した各層位での新出種に限った分析^⑨からすれば、コビキB技法は工人集団の間で3式期に一気に普及したようである。岡山城3式はコビキB技法の最古期と位置づけられる。

層年代は慶長年間前葉から中葉で、小早川秀秋から池田利隆豊国期の早い段階に相当し、岡山城外では小早川秀秋が慶長6年(1601)に建てた安住院本堂(岡山市国富)の当初瓦^⑩などが該当する。

軒平瓦の文様は2式との差がまだ十分には捉えられず、継続使用された瓦窓もありうるが、中心飾や唐草に萎縮化の傾向があるといえるかもしれない。唐草の巻きは、3転に2転が一定量加わり、1転もあって、2式より減少化傾向にある。軒丸瓦の文様も2式と大差ないとみられるが、珠文数も平均的には減少化傾向にありそうである。丸瓦内面などに残されたコビキBの条線は、次の4式に比べて粗いものが目に付き、終端付近が斜めにやや乱れるものがある。なお、この時点でのコビキB技法

は器壁の薄化には直ちに結びついていないようである。

棟込の菊丸瓦は、天守用などとしては2式期からあったものと思われるが、中の段ではII期の層位からは1点も出土していないし、下の段でも該当しそうな製品はない。2式期では、少なくとも菊丸瓦として特化した形態のものは、瓦葺き建物全般ではなく、極めて限定された建物にしか用いられていなかったとしか考えようがない。中の段で初めて菊丸瓦を伴うのがこの3式期であるが、ごく少量しか出土しておらず、菊丸瓦が普遍化するのは次の4式期からである。3式とみられる製品は、4式以降のものとは異なって周縁部をもたない形態で、文様は陽文の八弁花である。

d. 岡山城4式〔慶長年間後半～寛永年間初め（17世紀第1四半期）頃〕

中の段IV b期の層位に伴う資料を指標とする。下の段では、その整備の最大画期がこの期にあることと呼応して大量に出土したが、特に六十一羅木門北方の素掘り井戸¹⁷では良好な一括資料を得た。岡山城以外では備中高松城¹⁸（岡山市高松）や下津井城¹⁹（倉敷市下津井）などに多くの資料がある。

軒平瓦の中心飾は、三葉系では小形化したものが日立ち、葉脈表現は殆どみなくなるいっぽう、凸線表現で内が空白の三葉も目立つ。宝珠では引き続き凸線表現のものもあるが、立体的なものが加わる。唐草の巻きは3転も残るが、基本は2転で、しかも内がド、外が上に巻く形態に定まってくる。平行唐草も少量が残るようである。法量の軽薄短小化²⁰が進み、中の段の出土品では上限幅は24cm台が主ピーク、次のピークが20cm台以下にあり、応じて瓦当高も低いものが日につく。半瓦部の厚さは平均的1.7cm前後で2・3式に比べて薄くなる。また、2・3式に比べて、瓦当上縁の弧が浅いものが多く、側区は着実に長くなって、瓦当上角の面取りが無いものが主体的になる。面取りをもつものでも幅は狭い。瓦当面に対する文様面は2・3式より浅め（4～5mm）のものが多く、さらに極端に浅いものもあるが、つくりの丁寧さは2・3式より多少向上し、ヨコナデによる平瓦凹面の平滑度は増大傾向にある。ごく少量であるが、瓦当面に刻印をもつものがみられるようになる。

軒丸瓦は、巴の頭部どうしが離れ、尾部も離れたものが多いが、まだ尾部どうしがひつついで團線状になるものも残っている。珠文敷は、引き続いて減少傾向にあり、20個を越えるものはなくなり、17個前後のものが卓越する。5式に繋がる11～13個のものも目立ってくるが、珠文の人気さは未だ2～3式と同程度に小さい。また珠文帶に大字を配するものがある。文様面は軒平瓦と同じくかなり浅いものも含まれる。また軒平瓦の軽薄短小化に応じて、瓦当径も小形化が進み、中の段では15cm台にピークがあり、17cm以上の大形品が無くなる一方、13cm台に副ピークが表れて、次の5式への接近をみせる。断面形は、瓦当裏の丸瓦部の折れが浅いものが目立ってくる。丸瓦部の描く弧の深さも、やや浅めになる。丸瓦部内面のコビキB痕は、横一直線に整って通り、長大な粘土塊を一気にスライスする革新的な技法が、器壁の薄化や工程の効率化に結びついて定着した感がある。布目痕は引き続いて細かなものが多く、吊紐痕を残すものは減少していく。

菊丸瓦は多種が相応量みられるようになる。文様は五三桐、揚羽蝶、三巴があるが、菊文は未確認である。三巴は13～11個の珠文を伴い、小形の軒丸瓦と共通の瓦範を用いる事例がある。瓦当裏は、軒平瓦以上に深く折れ、差し込み部の描く弧は5式以降の菊丸瓦より深い。

各種の製品とも胎土は、依然として砂粒を含むものがあるが、その含有量や含む個体の比率は減少し、胎土の微粒化・均質化の兆しが認められる。生地が軟質でやや褐色がかったものが目につくが、この期に限られるものでもない。芯部が暗色、表部・外側が明色の皮層構造や断面の流状互層は減少

化傾向にあるがまだまだ多く、器面の炭素吸着の悪さも向上していない。

d. 岡山城 5式〔寛永年間～元禄年間（17世紀第2四半期～17世紀末）頃〕

中の段の上層期（第V期）新出種のうち、元禄11年（1698）の曹源寺創建期の瓦⁽¹⁶⁾より古いものを充てる。二の丸⁽¹⁵⁾では、承応3年（1654）の洪水砂以深での新相品がこの期の古い段階の指標となる。2～4式に比べ、作りの丁寧さが増大し、軒平瓦の唐草の形態と軒丸瓦の珠文数12が定型化する。

軒平瓦の文様の中心飾は、引き続き三葉と宝珠が卓越する。以前からの系譜を引くとみられる文様が多いが、略式・小形化している。宝珠系では、凸線表現のものより、中火のものが4式以上に優位となってくる。唐草は總てが2転で、多少の例外もあるが、内が下で外が上に大きく丸く巻くものにはば尽くされる。軒平の上弦幅は、中の段では主ピークが22cm台に移り、24cm台に副ピークがある。瓦当上面角の面取りは、ほとんど認められなくなる。瓦当の厚さは平瓦部の厚さと同程度に薄くなり、断面が極端に台形のものが減ってきて、2期に比べればかなり華奢な瓦当になってくる。側区は長く、瓦当高の1.5倍程度あって、その形態に定式化した觀がある。また側区の長さが左右で極端に違うこともなくなる。平瓦部四面は、瓦当寄りに板状押圧痕が観察できるものも多少は残るが、総じてヨコナデで丁寧に調整されている。

軒丸瓦では、巴部の形態が4式よりバラツキが減少して定型化を強める。古い段階から頭部が既にオクマジャクシ形に定まっているが、その頭部間距離は大きく、尾部は細い。新しい段階には、尾部は短く太くなり、頭部間は近接し巴の断面形は山形から蒲鉾形のものに主体が移る。珠文数は4式よりさらに減少し、当初から12個に定式化しているが、17個前後のものも少量は残る。また珠文は、古い段階にはまだ小さなものも残るが、底径8mm程度と4式より粗大化したものが定着していく。珠文が11で、残り1個の代わりに大字を配すものもある。瓦当径は、中の段では13cm台への集中が進む。

丸瓦部内面の布目痕はガゼ目状に細かいものがまだ残るが、ゴザ目状に粗いものが日につきだす。吊紐痕を残すものはあまり見かけない。

棟込みの菊丸は、珠文を伴わない三巴がようやく主体的になってくる。外縁は狭く、頭部間が離れ、尾部が長い。菊文では、肉厚で花弁中央が縮むものが主体的である。瓦当裏の括れが深いものが多い。中の段では瓦当径10～11cm級の大形品と8～9cm級の小形品に分れる。

各器種とも、胎土はさらに微粒化・均質化し、断面のサンドイッチ状色調変化や流状互層をなすものもあるが、量はさらに減少する。しかし、依然として器面の炭素吸着は良好とは言えない。

e. 岡山城 6式〔17世紀末～18世紀第3四半期頃〕

中の段の上層期（第V期）の新出種のうち、元禄11年（1698）の曹源寺創建期の瓦⁽¹⁶⁾を含めたそれ以後で、瓦当などにキラコを用いだす以前のものを充てる。その半ばの指標的資料に宝曆3年（1753）の大林寺（岡山市西川原）の当初瓦⁽¹⁷⁾などがある。5式以前に比べて作りが丁寧で、文様の画一化や法量の一応の規格化が遂げられ、近世瓦としての完成期の感がある。

軒平瓦の文様は、中心飾に三巴文を据えて、内が下外が上に巻く2転唐草を作り定式的な岡山系三巴文軒平瓦が出現し、圧倒的多数を占める。巴の巻きは当初から右巻きと左巻きがあるが、量の上では左巻きが優位である。唐草は古い段階では全体が細線表現で、大きく丸く巻くが、新段階には巻きがやや小さく浅めのものがある。その他の中心飾には宝珠、三葉、全形菊花状、カタバミ状などがあるが、唐草は中心飾が三巴と同じ定式的なものである。側区は、5式よりやや長めと言えるかもしれない

ないが、概して5式期に確立した長い側面形態が定式化し、左右の長さの均整も良く取れている。瓦当は、古い段階にはやや高めで、断面がまだ台形状のものが多いようであるが、やがて低くなり、断面は長方形化し、瓦当厚は平瓦部厚と同等かやや薄めとなる。瓦当面に対する文様面の深さは4mm前後にまでなっている。上弦幅は、中の段では22cm台のものが突出したピークをなし、立体的製品の小形化が進んで規格度が高まる。また、そうした中形品では平瓦部の長さが4式・5式より相対的に短くなっている、正方形に近付く。

軒丸瓦の文様は、巴の尾部が5式よりさらに短くなり、頭部の断面は蒲鉾形で定着し、珠文は12個である。古い段階は、珠文の底径が9~10mmと5式よりさらに大きめとなるが、珠文間隔が広く、周縁部が狭いものが目につき、巴の頭部同士もまだ広いが、中段階では周縁が広いものや、巴の尾部が小詰りなもののが含まれ、新段階では巴の頭部が粗大化して頭部同士も近接し、珠文も底径10mmを越えて粗大化していく。瓦当径は中の段では13cm台への集中が進むが、古い段階はまだ大きめのものがある。瓦当裏は、古い段階ではまだ明確な括れをもつものが多いが、新段階には平坦なものが普遍化し、全体が筒形化していく。丸瓦内面では、布目痕はゴザ目状に粗いものが圧倒するが、古い段階にはごく少量であるが辺縁痕をもつものがまだ残り、中段階から幅1~2cmの板状压痕を縱方向に残すタタキ痕が目立ちだし、新段階にはそれが普遍的かつ高密度になってくる。

棟込みの菊丸は珠文を持たない三巴が多く、5式期の製品より尾部が短く、頭部同士が近接したものとなってくる。また菊文では凸線による平面的表現のものが多い。

各器種とも胎上は、微粒化・均質化がさらに進行し、芯部も表側と同様に火がとおって明色となる単層構造のものがほとんどとなる。器面への炭素の吸着度は、まだ不十分なものが多く、概観として黒というより灰のものが多いが、5式以前に比べればかなり良好化している。

f. 岡山城7式 [18世紀第3四半期~19世紀第3四半期 (明治維新) 頃]

中の段の上層期(第V期)の内で、瓦当などにキラコを用いだした後で、明治維新までのものを充てる。キラコは天明8年(1788)建立の金山三重塔¹⁰⁰や寛政8年(1796)建立の松琴寺瑜伽殿拝殿¹⁰¹の当初瓦にみられる。6式に対し、製作技法や焼成法などが革新を遂げ、法量や文様・色・作り・胎上などの特徴のバランスがいっそう減少して、規格化が飛躍的に進行している。

軒平瓦の文様は、引き続き岡山系三巴文が圧倒的に卓越する。ただ唐草は太く盛り上がり、その端部はオタマジャクシの頭部状に丸くなる。三巴の巻きは左巻きもあるが、6式期とは逆転して右巻きが優位になる。瓦当は、平瓦部厚をやや下回る程度にまで薄く、華奢になっている。文様面の深さは5~6mmと6式に対して明確に深い。瓦当が描く弧は1式以来6式まで浅化的傾向があったが、この7式は6式よりもしろ深めのものが目につく。瓦当や平瓦部の各端部は角筋が鋭いものが多く、金属的な趣がある。平瓦部のナデ調整による平滑度も極めて高く、特に四面は整美である。この期の内の時期的变化は、まだ不明な点が多いが、唐草は古い段階には細線的で端部のみが丸くなっているが、巻きが大きく深いのに対し、中葉は全体が太線となり、後葉には全体がさらに太く潰れて巻きが浅くなると見通せる。

軒丸瓦では、巴の頭部はさらに粗大化し、それとのバランスのためか尾部は6式よりむしろ長めのものがある。珠文数は引き続き12個が主体であるが、16個や18個と多いものが型式として再登場する。珠文の底径は13~15mmにまで粗大化し、珠文帶の密度は相当に高い。特に新段階では文様区段での余白が僅かになり、文様区段に対する巴径の占める割合も減少し、周縁部が広くなる。瓦当径は中の段で

は13cm台へ集中し、法量面でも規格化が進む。丸瓦部の横断面が描く弧は浅く、瓦当外周の180度分には到底及ばず、その点でも軽量化が進んでいる。丸瓦部内面は粗い布目であるが、板状の叩きが整然と密に施されることが完全に普遍化している。

菊丸瓦でも、周縁部が広くなる。三巴文では頭部が粗大化し、文様区での余白が減少し、菊文は花弁全体が丸く盛り上がる形態が普遍的である。中の段では、6式期より小形品の比率が高い。

各器種とも焼成では、芯まで良く火が通って断面は必ず単色で明色度が高く、硬質に焼き上がっている。炭素の吸着技術も飛躍を遂げ、器面の大部分が黒くなり、一部は銀化している。胎土も均質で画一的なものとなるが、生地は5期よりやや砂質で、少量であるが鉄分粒や砂粒を含んで、還元炎焼成のため暗褐色に発色して目立つことがある。

2. 岡山城4式期以前の軒平瓦にみる同范・同文的同范関係

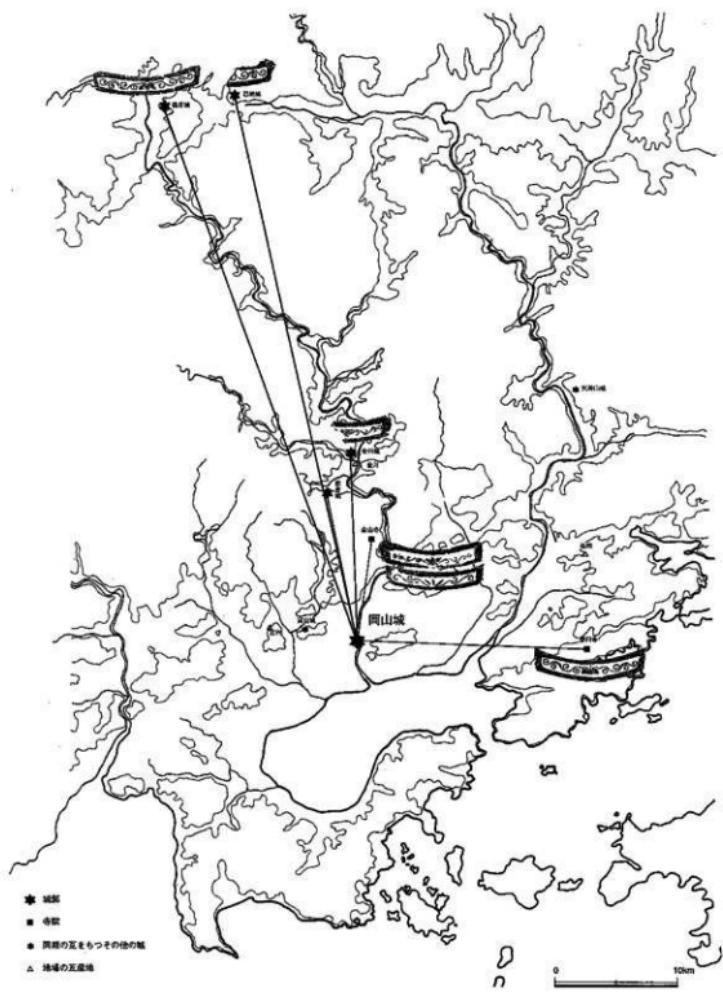
中の段ではI～IVa期の層位に伴って113種（瓦范）の軒平瓦が出土したが、下の段では中の段にはなかった種が下層から58種出土した。したがって、本丸1～4期（16世紀第4四半期～17世紀第1四半期）には最低171の瓦范による製品があったことになる。この期の製作でありながら上層からしか出土していない種、二の丸など本丸外だけで出土している種もあるので、岡山城全体としては、この期の軒平瓦の種類は現時点でも既に200種を越えている。これらは、岡山城内の各地点間だけでなく、城外の資料と同范・同文的同范関係をもつものがあることが判ってきた。ここでは、本丸1～4期の岡山城と城の外を繋ぐ資料に限って整理しておく。具体例は、表⁽²⁾の通りである。

なお、こうした同范・同文的同范関係の分析は軒丸瓦などについても行うべきであるが、文様の類似性が強いこともあるって軒平瓦に比べて同定作業に手間がかかるうえ、不確実性が大きく、今回の下の段出土品に限っても十分な検討が果たせていないので、割愛する。

a. 岡山城1式期（天正年間＝宇喜多直家・秀家若年期）

岡山城出土品と同范・同文的同范関係が指摘できるのは、今のところ播磨系の中心飾三葉・五葉のものだけである。県内の城郭では、篠葺城（大正五年銘・久世町三崎）、岩屋城（久米町中北上）、金川城（御津町金川）、御食倉城（御津町河内）がある。これらは、後の時代に流用品として城郭にもち込まれた可能性が残るものもあるが、おおむね旭川沿いに南北に分布し、宇喜多氏が対毛利氏の戦略のなかで、瓦葺き建物の導入という設備投資を伴って支城整備が行われた結果と評価できよう⁽³⁾。本城は、いうまでもなく旭川下流にある岡山城である。また、静円寺（天正7年・邑久町木庄）は宇喜多氏の本貫地である邑久郡にあり、金山寺（岡山市金山寺）は宇喜多直家が天正3年から堂宇を再興したとの寺伝をもつ。宇喜多氏が主導となって領内に建てた主要建物には、播磨系の工人による瓦が採用されたとみて良さそうである。

ただ、この頃すでに、備前福田（備前市福田）、備前金川（御津町金川）、備中宮内（岡山市吉備津）などの地場の瓦工人も居た。彼らは基本的に近隣寺社への瓦供給を目的とするものであったとみられるが、城郭では、宮内の製品が宇喜多氏の支城である富山城（岡山市矢坂）や遠く大坂城（大阪市中央区）⁽⁴⁾で確認され、岡山城でも将来出土する可能性が高いし、福田の製品とみられるものも現に岡山城（下の段114）で出土している。また、金川もしくは未知の邑久郡あたりの工人による製品が宇喜多氏の支城としての天正10年段階の虎倉城（御津町虎倉）で知られているし、播磨と並んで福田の製品の可能性もある瓦が、宇喜多氏もしくはその旧主家の浦上氏の城である天神山城（佐伯町田土・



第179図 本丸1期（天正頃）の同範・同範的同文関係

岡山城をめぐる同範・同範的同文関係

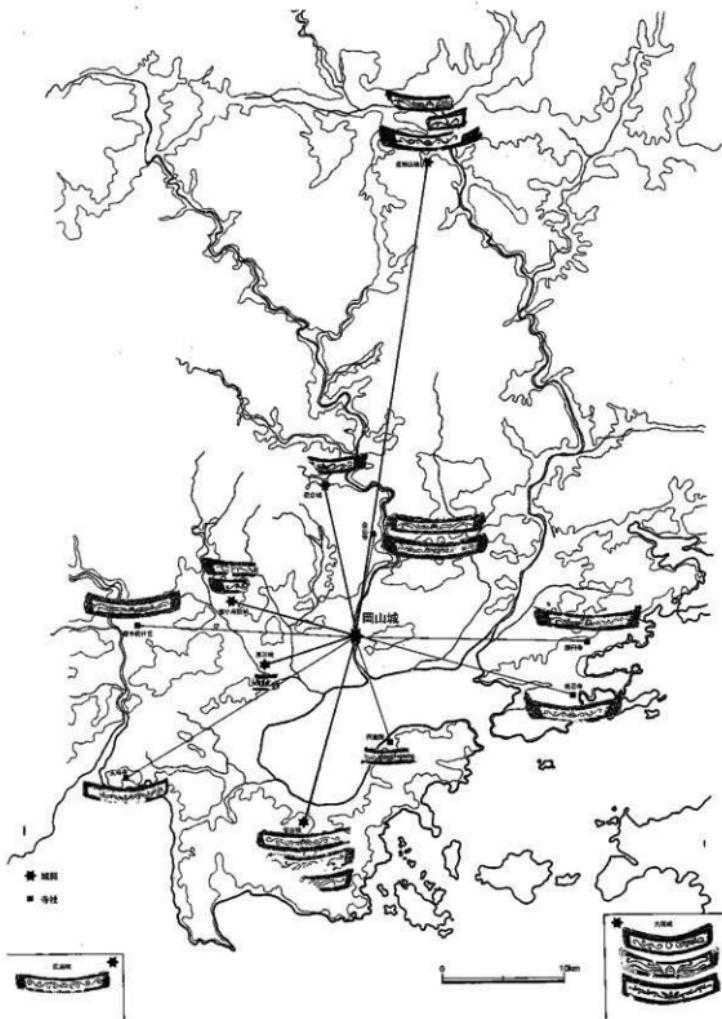
瓦時期	中の段	下の段	二の丸	岡山城以外の城・遺跡・寺社
1式		31	県庁17	勝内寺(邑久町木庄)・龍野城(久世町三美)・尼星城(久米町中北上)・妙見寺(兵庫県津名郡一宮町)・大坂城(大阪市)八百五
1式	2	32・33		金川城(御津町)・鶴倉城(御津町)・金山寺(岡山市金山寺)
1式		38・39		心光寺(姫路市)・隨願寺(姫路市)・恒星城(兵庫県香寺町)・大坂城(大阪市中央区)体3687
1式		40		金山寺(岡山市金山寺)
2式	5			宝島寺(倉敷市矢柄)
2式	8	43		備中高松城(岡山市高松)參4
2式	11	41		大坂城(大阪市中央区)体3640
2式	17			鷺川城(岡山市鷺川)
2式	81	124・125		金山寺(岡山市金山寺)・常山城(玉野市藤木・瀧崎町迫川)北・荒神山城(津山市荒神山)
2式	123	131	(本丸内櫓23)	金山寺(岡山市金山寺)・円蔵院(岡山市郡)
2式			県庁162・163	鹿忍寺(牛窓町鹿忍)・荒神山城(津山市荒神山)
2式	80一部	117・122		静岡寺(邑久町本庄)
2式	79	119		大坂城(大阪市中央区)体3648
2式	84	123・127		備中鷲社宮(鷲社市鷲社)
2式	169		県庁172	広島城(広島市中区)中瀬15
2式			中電64・65	常山城(玉野市藤木・瀧崎町迫川)玉
2式	51		県庁164	常山城(玉野市・瀧崎町)報
2式	105	134	中電76・94	大坂城(大阪市中央区)体3652
2式	7			荒神山城(津山市荒神山)
2式		44		徳倉城(御津町河内)
2~式	64	99・100		備中高松城(岡山市高松)參6・津寺遺跡(岡山市津寺)C35
2~式		109・110		下津井城(倉敷市下津井)7
2~式	10	45・46	中電89・95	虎倉城(御津町虎倉)・下津井城(倉敷市下津井)5
3式		36		虎倉城(御津町虎倉)
3~4式	68	108		瀬戸高松城(高松市)
4式	23	52~54		下津井城(倉敷市下津井)2
4式	27	49・50		備中高松城(岡山市高松)22・津寺遺跡(岡山市津寺)C33・下津井城(倉敷市下津井)4?
4式	55	90・91	中電105	下津井城(倉敷市下津井)9
4式	72			下津井城(倉敷市下津井)15
4式	85			備中高松城(岡山市高松)31・津寺遺跡(岡山市津寺)C31-32
4式		135	県庁	下津井城(倉敷市下津井)13
4式		144		下津井城(倉敷市下津井)11
4式		151		安住院(岡山市安富)IV類
4式	129	176・177		金山寺(岡山市金山寺)

*各資料の出典は第IV章第2節の表末(175頁)参照。番号類は各出典での遺物番号。()の地名のうち市・町名から始まるものは岡山県内。岡山城内の地点だけに留まる関係や5式以後の例は省略。

岩戸)や姫路城(姫路市)にある²²⁾。したがって、播磨系工人による瓦が宇喜多氏の城や領内の寺社で独占状態にあったわけではない。

b. 岡山城2式期(文禄年間~慶長初め頃=宇喜多秀家期)

岡山城出土品と同範・同範的同文関係が指摘できる城郭には、県外では人坂城(大阪市中央区)と広島城(広島市中区)がある。岡山城から共に180kmもの距離を隔てている。いうまでもなく大坂城は宇喜多秀家の主君である秀吉・秀頼の居城で、豊臣政権の所在地であるし、広島城は豊臣政権を宇喜多秀家と並んで支える毛利輝元の居城である。そこに、離れ点として、岡山城と同範・同範的同文の瓦が及ぶことは、当時の政治関係や工人移動もしくは商品流通を考えるうえで、注目すべき事実である。少なくとも、大坂城については、製品の分布・技法・胎土などから、岡山城下に付随する工人によって岡山で焼かれた瓦が船で人坂に運ばれ、宇喜多秀家の屋敷以外の市中にも一定量が流通した



第180 本丸2期（文禄頃）の同范・同范的同文関係

ものと考えられる³⁰。

いっぽう宇喜多秀家の領内の城郭では、常山城（玉野市藤木・瀧崎町迫川）、撫川城（岡山市撫川）、備中高松城（岡山市高松）、徳倉城（御津町河内）、荒神山城（津山市荒神川）に例がある。これらも、岡山城に付属する瓦飾の製品と考えてよく、各城郭の瓦のうち主体的部分を占める。岡山城と同範・同範の同文関係をもつ瓦、あるいは瓦自体の存在は、当時の領内にあった中規模以上の城郭に決して普遍的に認められることではなく、前代からあった城郭を一定の戦略のもとに選び出し、岡山城の主要支城として位置づけて、岡山城下の工人を動員して瓦葺き建物の建築という設備投資を行った結果に違いない。岡山城から常山城は南南西16km、撫川城は西南西8.5km、備中高松城は西北西11km、徳倉城は12.5kmの位置にあり、岡山の南口、西口、北口を固める衛星支城として評価でき、岡山城から北北東に40kmの荒神山城は美作支配のうえでの戦略的拠点として評価できる。

県内ではそのほか、金山寺（岡山市金山寺）、円蔵院（岡山市郡）、備中總社宮（総社市総社）、宝島寺（倉敷市矢柄）といった寺社、それに津寺遺跡（岡山市津寺）に例がある。父の直家に統いて秀家が庇護したとみられる金山寺はともかく、他は秀家との直接関係のはどは定かでない。岡山に近い位置であるから、商品として工人の手による自主流通の可能性もあるし、他の城郭などからの二次的流用品であった可能性も考えられる。

なお、確かな同範品で、範の切詰や傷の進行から判る製作順序は、中の段8の範では中の段8a→下の段43→中の段8b・備中高松城参4、中の段11の範では中の段11→大坂城体3640→下の段41、中の段81の範では中の段81a・常山城→中の段81b・荒神山城・金山寺→下の段124・125、中の段105の範では下の段132→中の段105→中電94→大坂城体3652である。いずれも岡山城本丸例が古く、製作当初の範は必ず本丸用に使われ、遅れて他所や他城用にも供されるという図式が窺える。このことは、支城の整備より本城の岡山城の整備が先行的であったことを示し、同時に岡山城2期の瓦の主体は岡山に本拠をもつ工人の製品であることを傍証する。

c. 岡山城3式期・4式期（慶長年間前半～寛永年間初め=小早川秀秋期～前池田期）

3式期とみられる瓦で同範関係をもつものとして、虎倉城（御津町虎倉）がある。この城は天正16年（1588）をもって廃城になったとされてきたが、関ヶ原合戦直後の設備投資があったことは明らかである。小早川秀秋が、岡山の北西の道筋を固めるためにこの山城を補強したのであろう。

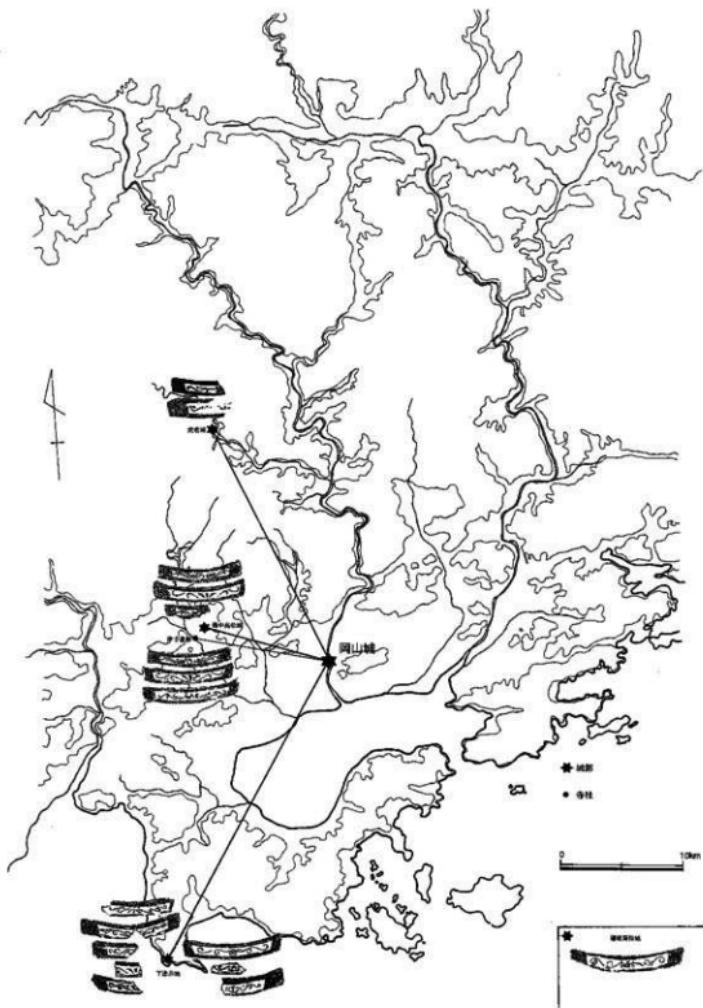
4式期の県内城郭との例として、下津井城（倉敷市下津井）と備中高松城（岡山市高松）がある。

下津井城は瀬戸内航路を固める役割をもって、慶長14年（1609）まで岡山藩の家老として城主であった池田長政が大改修した城である。瓦の供給先を岡山の瓦工人に求めたのは必然的であるが、播磨の工人が作ったとみられる、姫路の心光寺例と同範もしくは同範の同文の瓦も混ざっており³¹、下津井城の本城は岡山城であるが、岡山藩の事実上の本藩は池田輝政の居城の姫路城に所在したという二重関係を、瓦の同範関係が直接に反映している。

この期の備中高松城は、もと宇喜多家内で旗本となった花房職之の初期高松陣屋で、職之にとっても縁のある岡山という大規模生産地に瓦の供給先を求めざるを得なかった結果であろう³²。

津寺遺跡の瓦は、岡山城と同時に近接する備中高松城（初期高松陣屋）とも同範関係をもつものが殆どで、備中高松城からの流用品、ないしはこの地にあった4期の建物に備中高松城と全く同じ流通ルートに乗る瓦が葺かれた結果とみられる。

なお、瓦製作が2式期から4式期に跨ぐ可能性がある中の段10と64の範での製作順序は、範の状



第181図 本丸3期・4期（慶長頃）の同窯・同窯的同文關係

態変化から、下の段45・46→中の段10→下津井城5・虎倉城・二の丸中電89・95、下の段99→中の段64→高松城参6→津寺遺跡C35→下の段100であった可能性が高く、やはり岡山城例が先行的である。

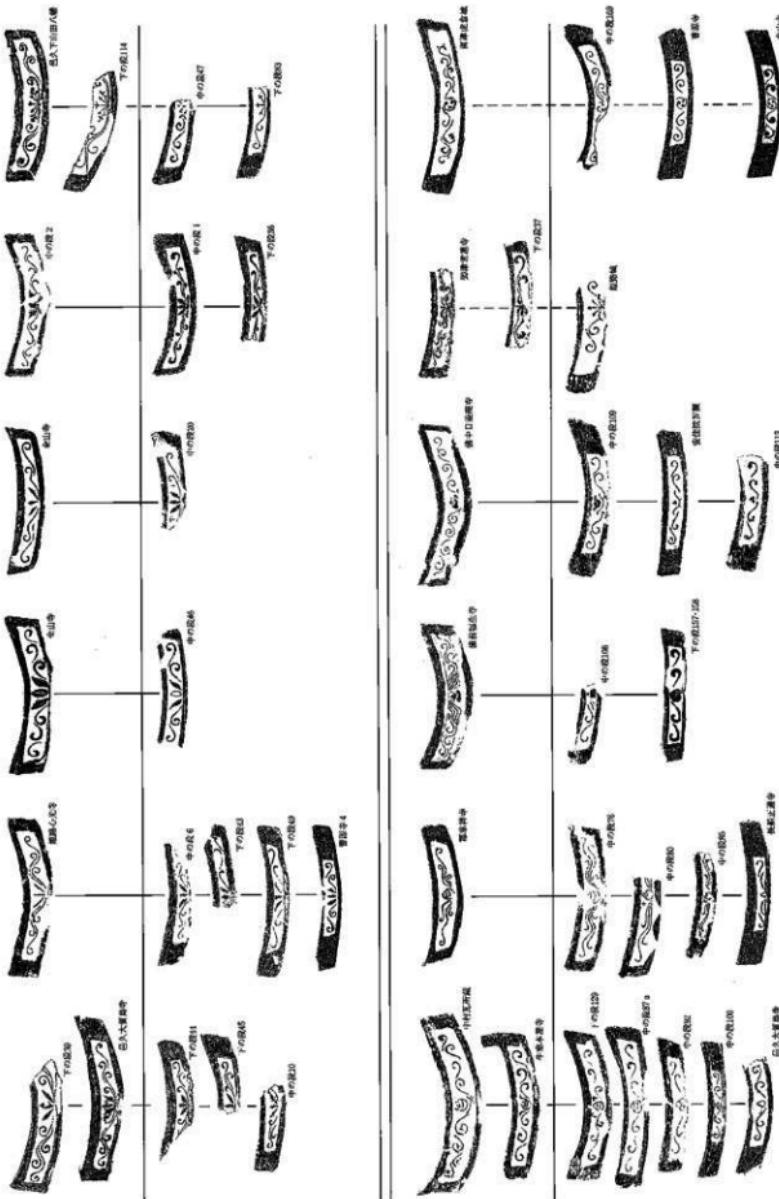
3. 軒平瓦の文様系譜

岡山城2式の瓦の殆どは、同範品や同じ特徴をもった製品の分布が岡山城とその周辺に集中することなどから、岡山城下に付属する瓦工人の製品とみられるが、文様は極めて多種多様である。第182図は、岡山城2式に先行する1式期もしくは室町時代後期から、岡山城5式・6式に至る瓦のなかで、文様が似通ったものを選び出して並べたものである。各系列とも上のものが古く、細線の位置がおおむね1式期と2式期の境とみられる。

各系列のうち1式期もしくはそれ以前の瓦をみると、先述のように中心飾三葉と五葉のものは播磨系工人の製品とみられ、特に下の段39と中の段2は胎土の特異性から姫路周辺で焼かれた可能性が高く⁽⁷⁾、心光寺はまさに姫路市内の寺である。とくに三葉の系列は2式以降の瓦に極めて類似した文様が続くことが判る。中心飾樹状の下山田八幡例と下の段114は備前福岡（和氣郡=備前市福岡）の工人の製品とみられる。中心飾凸線宝珠では、中村瓦例は岡山県南部での採集品としか判らないが、本蓮寺は備前南部の瀬戸内に臨む牛窓（邑久郡）にあり、掌善寺例は2式期に下る可能性もあるが寺の所在地はやはり備前南部の瀬戸内に臨む岡山市郡（児島郡）である。これらは、備前南部の未知の工人による可能性も窺える。中心飾中突宝珠例は、共に室町時代に通り産地は特定できないが、福生寺は備前市大内（和氣郡）、日差庵寺は備中南部にある。中心飾蓮華状の常蓮寺例は備前西中部の御津町金川に供給されたものであるが、類似した中心飾は室町時代後期の関西方面でもよく見かける。中心飾三巴の虎倉例は、その金川もしくは備前南部の未知の工人による製品の可能性が考えられるものである。

いま示した各系列が、文様に系譜関係があると本当に評価できるかという問題、仮にそれがあつた場合でも直系・傍系の別や程度、工人系統の持続を示すのか製品の模倣に過ぎないのかといった問題が残るが、少なくとも中心飾三葉系では、姫路周辺の工人の一派による岡山への移住と定着を想定して良いかもしれない⁽⁸⁾。いずれにせよ、2式期の岡山城下に成立した瓦工集団は、播磨姫路の系譜を引くものと含みながらも、その単一系統に尽きるのではなく、姫路以外の地域や地場の系譜を引く工人なども含めた、多系統の寄せ集まりで、彼らに指導もしくは影響を受けた水増し的な新人工人も多数含まれたに違いない。製品量の膨大さ、瓦範の多さ、製品の粗雑さはその事を如実に物語るのであろう。工人たちは、恐らく互いに影響を受け、廃絶するもの、余所に移るもの、新たに加わるものがありながら、その系譜に従い、あるいは他を模倣して、全体とすれば雑多な文様の瓦を作り続けたものとみられるが、初めて6式期に至って、工人間に共通する文様をほぼ全面的に採用した。これこそ、中心飾に三巴を据え、内が下、外が上に大きく巻く、岡山系三巴文軒平瓦の確立である。このことをもって岡山型式の軒平瓦の成立、あるいは眞の意味での岡山系瓦工人の出現との評価ができるよう。元禄年間頃とみられるこの変化は、岡山城下南西の瓦町・七軒町周辺から、城下南縁の二日市・七日市や城下北西縁の瀧本町への生産拠点の移動を伴う瓦工人の再編成の結果と展望できる⁽⁹⁾。（秉岡）

第4節 瓦について



第182図 軒平瓦の文様系譜 (1/8)

注

- (1) 乗岡実1997 「瓦について」『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』岡山市教育委員会
 - (2) a 上掲1と同じ。
b 黒田慶一・乗岡実2000 「豊臣氏大阪城と宇喜多氏岡山城の同瓦瓦」『大阪城と城下町』思文閣出版
 - (3) 田中幸夫1994 「秀吉の城郭と播磨系瓦工人」『第2回豊岡城郭研究会 研究集会資料』豊岡城郭研究会
 - (4) 上掲2 bと同じ。
 - (5) 乗岡実2000 「中世山城の瓦三題」『吉備 されど吉備』古代吉備岡を語る会
 - (6) 乗岡実1998 「吉備津神社御釜殿の瓦と宮内の瓦筋」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1996年度 岡山市教育委員会
 - (7) 上掲5と同じ。
 - (8) 森田克行1984 「IV 屋瓦」『浜津高規城』高槻市教育委員会
 - (9) 上掲1と同じ。
 - (10) 乗岡実1993 「屋根瓦」『安佐院本堂保存修理報告書』岡山市教育委員会
 - (11) 乗岡実2001 「林信男氏墓集の考古資料I」「岡山市埋蔵文化財調査の概要』1999年度 岡山市教育委員会
 - (12) 藤原好二2000 「山本慶一氏寄贈の資料I」「倉敷埋蔵文化財センター年報7」倉敷埋蔵文化財センター
 - (13) 黒田氏 - 1999 「第VI章 離宮跡の調査 第1節 NW95-24(廻塗)」『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1996年度-』大阪市文化財協会 によれば、大阪城や堺環濠都市でも慶長初めに起った瓦の軽薄短小化が指摘されている。ただ黒田氏は、慶長人地図との関連を呈示するが、源原から遠い岡山では必ずしも原因として当てはまらないかも知れない。また、岡山城では今のところ2式と3式の間ではなく、2・3式と4式の間の李象として捉えられるので、曆年代は同じ慶長年間でも岡山の方が大阪・堺よりやや遅れる可能性が高い。
 - (14) 乗岡実1999 「曹源寺の瓦と岡山藩の御用瓦削」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1997年度 岡山市教育委員会
 - (15) a 岡山県教育委員会1991 「岡山城二の丸跡」
b 中山電力内山下変電所建設事業埋蔵文化財調査委員会1998 『岡山城二の丸跡』
 - (16) 前掲14と同じ。
 - (17) 前掲14と同じ。
 - (18) 1999年度から屋根の解体修復を実施中。
 - (19) 乗岡実1996 「岡山市近郊における近世瓦の生産と流通」『岡山市の近世寺社建築』岡山市教育委員会
 - (20) 各資料の出典は本書第V章第2節の表注(175頁)と同じ。
 - (21) 前掲5と同じ。
 - (22) a 前掲6と同じ。
b 前掲2 bと同じ。
 - (23) 前掲5と同じ。
 - (24) 前掲2 bと同じ。
 - (25) 前掲12と同じ。
 - (26) 前掲11と同じ。
 - (27) 前掲2 bと同じ。
 - (28) 繁體系城郭の建設時に播磨系の中心飾三葉の軒平瓦が採用されることを全国各地に認められるが、岡山の場合、その系譜を引くとみられる文様が以後も引き続き製作されることは注目される。また、姫路城やその周辺の資料（姫路市立城郭研究室収蔵品等）をみると、天正年間の例では確かに中心飾三葉が卓越するが、文禄・慶長以降から江戸前期全般を展望すれば、その影は意外に薄く、むしろ岡山側のはうに色濃く残っているように思われる。逆にいえば、岡山周辺に及ぶ中心飾三葉系は1式期では確かに同範・同範の同文関係で播磨と繋がっているのに、2式期以降では播磨の資料と同範・同範の同文関係をもつものは未確認で、明らかに岡山周辺に重心がある。もし、一般工人の岡山への移住があったのなら、その契機は複数の想定できる。文禄年間（ただしこビキAをしばらく温存する集団）では岡山城での瓦需要の急激な高まりと姫路城での瓦需要の低さ（秀吉と秀家の政治関係も介在しうる）、慶長年間中葉では姫路に木挽をもつ池田家による岡山藩の支藩化、元和・寛永年間では池田家の本拠地の姫路から岡山（鳥取）への移転などが考えられる。なお、播磨系工人の外への移住は、岡山以外の地域に対しても想定できる。
 - (29) 前掲19と同じ。
- *尼崎後、中の段57、中の段50=下の段82、下の段92と各同范の可能性をもつ瓦が誤岐高松城で出土していることを確認した（香川県埋蔵文化財調査センター佐藤亮馬氏のご教示）。中の段68=下の段108とも合わせて、これらは岡山城御では本丸3・4期の製品である。

第5節 歴史的環境復元整備に向けて

本書で報告する岡山城跡本丸下の段の発掘調査は、史跡岡山城跡保存整備事業の一環に基づいて、岡山市教育委員会が実施したもので、目的と経緯を第II章第1節に記述しており、成果を史跡整備——歴史的環境の復元整備に反映すべきであるが、当初計画の本丸中の段を対象とした史跡整備が、既刊の『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』に記載しているように平成8年度に実施不能の状況となっている。このため岡山市教育委員会文化課（現文化財課）は、平成9年度以降には状況変化の生じるまでは史跡岡山城跡保存整備事業の整備自体の施工を擇上げにし、遺構確認の発掘調査と、保存修理と追加指定の基礎資料となる指定外を含めた城跡石垣構造全体の調査、さらには本丸内破損石垣の保存修理の調査及び設計と同事業の国庫補助事業による継続施行を図ってきた。そして、平成11年度からは孕み出しの著しい中の段西側南半石垣の保存修理に着手し、平成12年度に修復対象箇所全部の石垣解体を終え、本格的な保存修理の施工段階を経るに至っている。

一方、中の段の歴史的環境復元整備の実施にあたって、岡山市教育委員会は、平成7年10月に「史跡岡山城跡整備委員会」を設け、同委員会の検討協議と教示指導の許に整備内容の策定を行って、施工する態勢を整えている。しかし、史跡岡山城跡保存整備事業の当初計画に基づき、平成7年度に策定して、実施設計を終えた整備内容が、市長のコンセンサスを得られなくて平成8年度に実施不能の状況となり、国庫補助事業による同整備事業を継続させるための、整備内容の大幅な変更を承認した平成8年7月の第4回の同委員会以降には、この委員会を開催できる状況になかった。当初計画の志向した岡山城跡の史跡としての整備は、整備自体の施工を擇上げにして調査と破損箇所の修復が進行するという変則的な施行状態を来していた。その後、平成11年2月に市長が交代したことによる政治情勢の変化を受け、平成11年度には史跡岡山城跡整備委員会の再開の図れる状況となった。

第5回の史跡岡山城跡整備委員会（平成11年5月21日）での検討協議事項

- ・史跡岡山城跡保存整備事業の実施状況（平成8年度～10年度）の説明と了解。
- ・歴史的環境整備の内容に関する第3回委員会までの決定事項の再確認。
- ・「史跡岡山城跡保存整備計画（第II期）」の素案検討。
- ・11年度の実施内容の協議

これまでの実施状況と11年度の実施内容は了解され、歴史的環境整備の内容については現行公園の管理面との整合の課題や、本段での施工の必要性が提言され、整備計画（第II期）については指定地外の城郭遺構の保存と埋没石垣への施設的対応が提起された。また、同委員会の再開にあたって事務局の事業に対する気構えと県と市の行政的連携が指摘された。

第6回の史跡岡山城跡整備委員会（平成12年2月29日）での検討協議事項

- ・史跡岡山城跡保存整備事業の再確認と発掘調査成果の報告。→再確認：中の段を整備対象地にし、幕末最終状態を整備の姿とする。内容は表書院の殿舎群を地表（平面）表示、基壇レベル（床面）表示、壁や柱等の下側部分立上げ復元と、二段構成による半立体展示とする。茶室は起し図があるので復元建築を検討する。築城期の埋没石垣は一部を掘出して俯瞰的露出展示を行う。大納戸櫓の復元建築は基本設計ができているが凍結状態となっている。（財政的に困難な実情）

第Ⅴ章 調査成果の整理と展望

- ・11年度実施事業の内容説明。→下の段の発掘調査実施状況と中の段西側南半石垣破損箇所（孕み出し）の保存修理の着工。（一部分の解体施工）。
- ・「史跡岡山城跡保存整備計画（第Ⅱ期）」検討原案の検討。→追加指定の課題と指定域の拡大（二の丸城）への見直し作業の必要性が提起され、丸の内中学校跡地での県立図書館建設の問題と将来的課題や二の丸城での文化財保護法の対応、さらには三の丸の取扱い等も議論となった。城跡全体の保存の思想が提起された。史跡整備は中の段から取掛ることの再確認を行う。

※今回の整備委員会は新市長の出席を得ての検討協議。

第7回史跡岡山城跡整備委員会（平成12年11月25日）の検討協議事項

- ・12年度実施事業の内容説明。→下の段発掘調査報告書の作成と中の段西側南半石垣保存修理の本格的施工（解体工の終了）。来年度の積直し工における法と反りの設定、裏込めの分量、天場レベルの設定、石材の分止まりと補充等の検討課題が提起された。
- ・「史跡岡山城跡保存整備計画（第Ⅱ期）」検討原案の検討。→史跡岡山城跡保存整備事業の歴史的環境復元整備は中の段から実施することの再確認と、平成7年度末段階での整備では大納戸櫓建物等城郭建築物の復元を伴う内容であったものを、今後は建築物復元を意図しない整備内容で検討を進めるとの方針を提起。A・B（平成7年度までの施工案）・Cの3案の提示。また本丸全体の整備計画の叩き台案を示しての協議で概算額算出の必要性が指摘される。さらに、指定地の拡張（二の丸城）と対象地区での建設や改築の計画との相合せや、その市としての施策決定への取組に対する提言がなされた。

・岡山城跡本丸中の段西側南半石垣保存修理現場の視察

※今回の整備委員会は谷口委員長を含む3名の委員と文化庁記念物課の担当調査官が欠席となり、次回に欠席の方々の意見を頂いて更に煮詰めていくことになった。

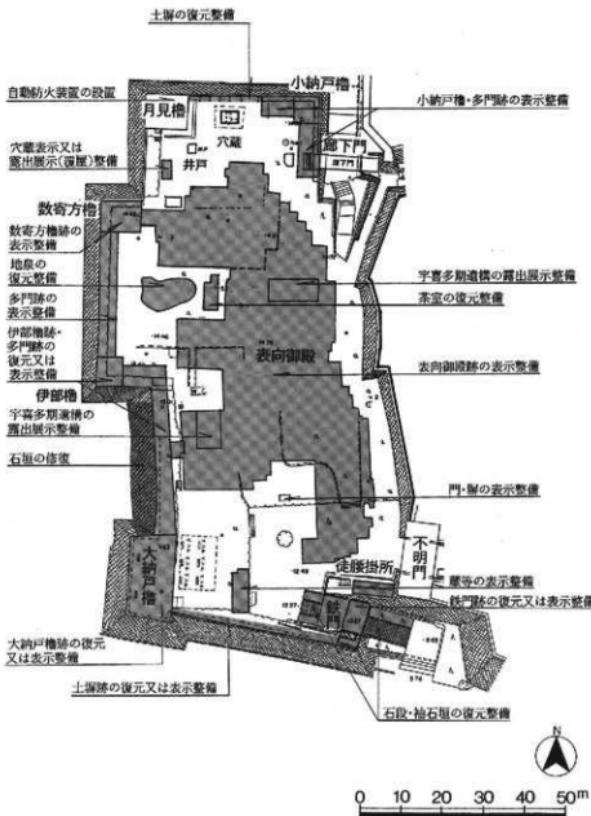
◎「史跡岡山城跡整備委員会」（平成12年度）

主 催 岡山市教育委員会

委 員 長	谷口 澄夫	岡山大学名誉教授・前岡山市文化財保護審議会委員 (平成12年1月15日逝去)
副 委 員 長	水内 嘉康	前岡山市文化財保護審議会会長
委 員	牛川 喜幸	長岡造形大学教授
委 員	狩野 久	前岡山大学教授・岡山市文化財保護審議会副会長
委 員	加原 耕作	前岡山県立博物館長・岡山市文化財保護審議会委員
委 員	坪井 清足	元興寺文化財研究所長
委 員	細見 啓三	岡山市文化財保護審議会委員
委 員	松井 英治	岡山県教育委員会文化課長
担当調査官	本中 真	文化庁文化財保護部記念物課主任調査官
事 務 局	小坂 夏彦	岡山市教育委員会生涯学習部長
	山宮 徳尚	岡山市教育委員会生涯学習部文化財課長

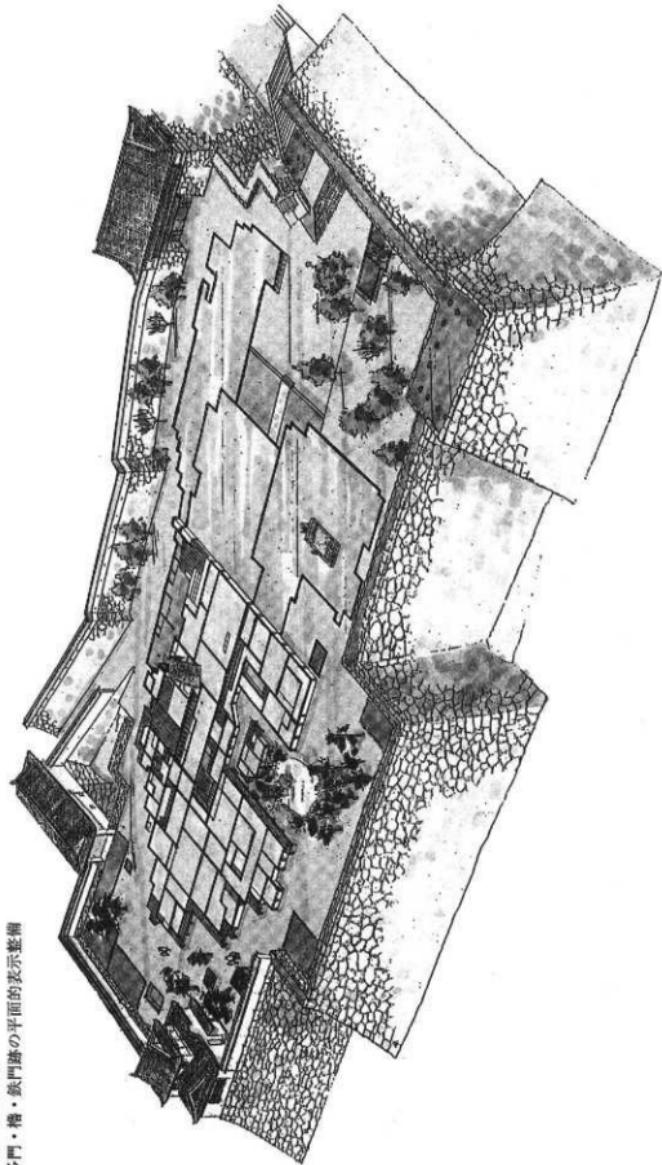
事務局	三宅 一正	岡山市教育委員会生涯学習部文化財課調整主幹
	根木 修	岡山市教育委員会生涯学習部文化財課文化財専門監
	神谷 正義	岡山市教育委員会生涯学習部文化財課主査
	乗岡 実	岡山市教育委員会生涯学習部文化財課主任
	内田 博	岡山市都市整備局公園緑地部緑政課長

なお、史跡岡山城跡保存整備事業の実施状況については、第II章第1節に掲載している「史跡岡山城跡保存整備事業実施経過」の表に纏めているとおりである。
(出宮)

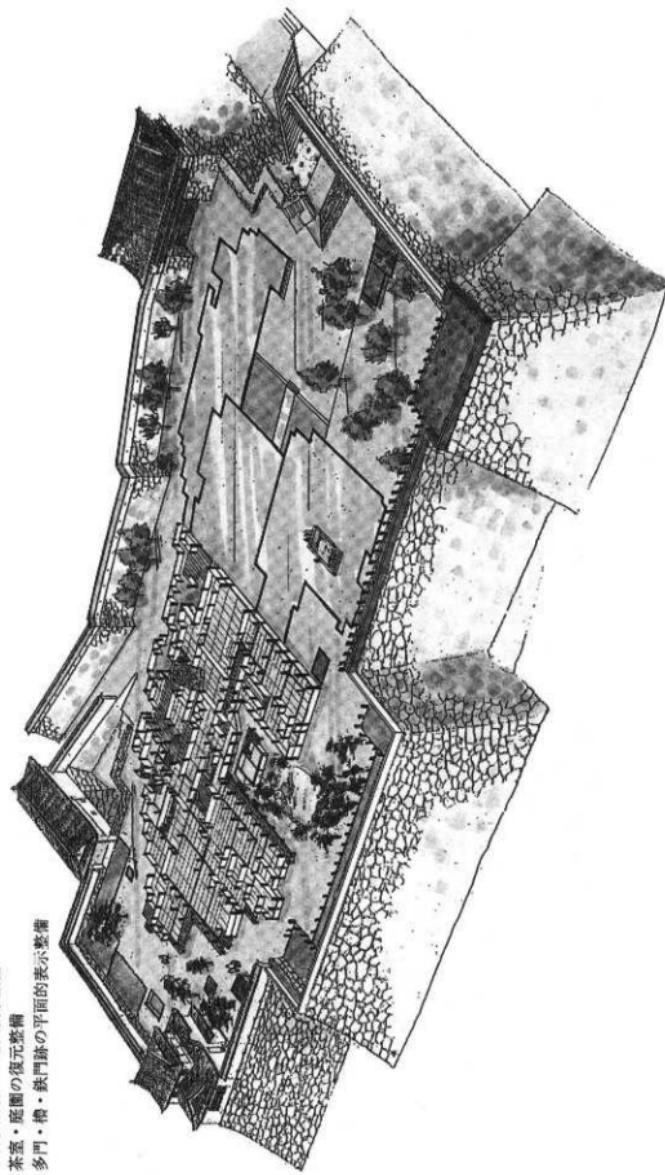


第183図 中の段整備計画概念図

- ・表向側露盤の平面的表示整備（南半の玄関・広間・書院の区画表示、北半の中奥は立体的表示）
- ・宇喜多類石垣の露出展示整備
- ・庭園の復元整備
- ・多門・格・武門跡の平面的表示整備



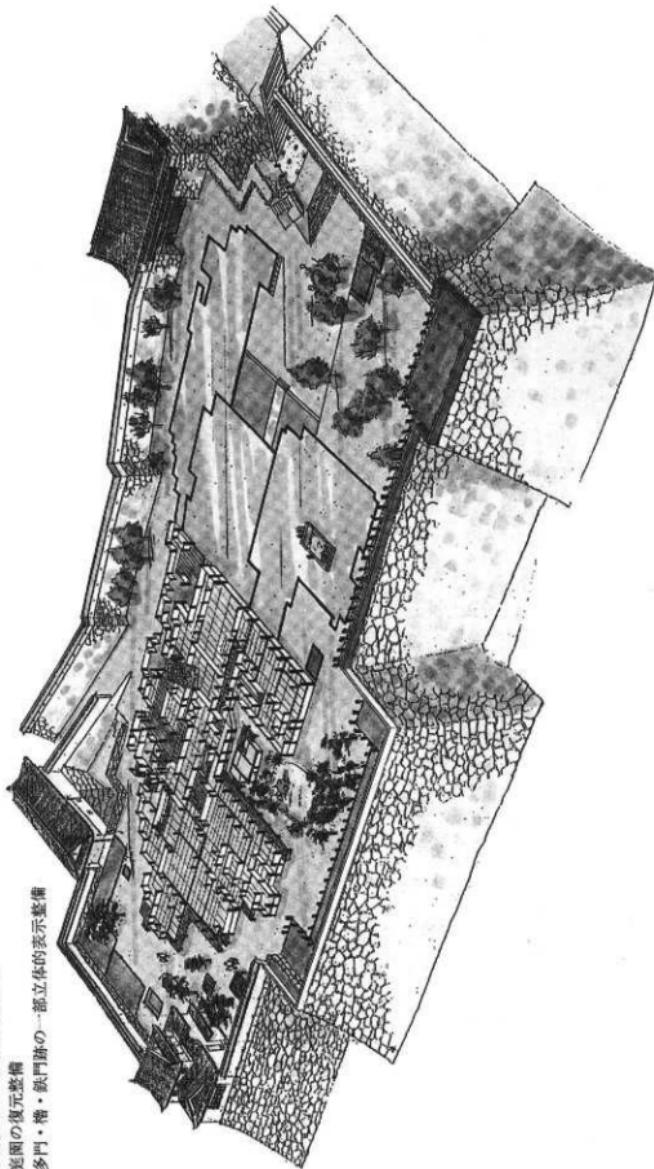
第184図 中の段壁面イメージ図－A-A'－



- ・表向御殿跡招客閣周辺の立体的表示整備
(南半の玄関・広間・書院の区画表示。北半の中奥の部屋割りの立体的表示、招客閣は一部屋根設置)
- ・宇喜多朝石垣の露出展示整備
- ・茶室・施闇の復元整備
- ・多門・櫓・鉄門跡の平面的表示整備

第185図 中の段築跡イメージ図－B案－

- 表向御殿跡の一部立体的表示整備
(南半の玄関・広間・書院の区画表示。北半の中奥は部屋割りの柱・壁まで立体的表示～柱・壁は必要に応じて取り外し可)
- 宇喜多邸石垣の露出展示整備
- 庭園の復元整備
- 多門・櫓・鉄門跡の一部立体的表示整備



第186図 中の段築跡イメージ図—C(2) 第一

岡山城本丸下の段出土の動物遺存体

石丸 恵利子（広島大学大学院文学研究科）

松井 章（奈良文化財研究所）

1. はじめに

今回、扱う資料は、岡山城本丸下の段の発掘調査で出土したもので、前回の本丸中の段⁽¹⁾に引き続き、岡山藩の台所を報告する。また岡山城では、本丸中の段と並んで二の丸跡でも発掘が行われ、そこから出土した動物遺存体も報告されている⁽²⁾。

前回報告した岡山城本丸中の段には表書院が存在し、そこでは日常生活の場ではなく正月や特別の儀礼の際などの節会料理の残滓が多くったと考えられるが、今回の出土資料は、下の段から階段を上ってすぐに位置する本段御殿から生じた食物残滓を廃絶した井戸に捨てたり、一旦、ゴミ捨て場に投棄した食物残滓が整地のためにこの場所に運ばれて堆積したものと考えて良い。したがって、今回の資料は城主をはじめとする上流の武士階級の日常の食生活を示唆するものと考えられる。

2. 出土した動物遺存体の概要

出土した動物遺存体は約三千点以上にのぼり、その多數を占めるのは魚骨である。いずれの骨も残りは良く、風化しているものはほとんどみられない。廃棄されてから速やかに埋没したものであろう。出土した魚骨の中でも特に椎骨が多いのは一個体の部位ごとの個数からみれば当然であろう。しかし椎骨は魚骨の中でも同定が困難なのが多く、大部分が不明のままとなった。その中で種類・部位まで同定できたのは828点で、そのうち出土量同定表に反映することが出来たのが784点であった。内容は、頭足綱1種、コウイカ類の甲8点、軟骨魚綱1種でエイ類が1点、硬骨魚綱22種類で717点、鳥綱4種類、34点、哺乳綱3種類、24点である。種類別で多かったものは、椎骨数を除いてもマダイが309点、表中の破片数のうち39.4パーセント、スズキが261点で33.3パーセントと、両種で72.7パーセントと圧倒的多数を占める。ただし、マダイとスズキは、クロダイと並んで、縄文貝塚から出土する代表的な魚種である。縄文貝塚の場合は、貝塚に投棄された食料残滓のうち、これらの種類がもっともイヌによる食害を受けにくかった、換言すればイヌでさえ食べることの出来なかつた大きく堅い骨を持っていた結果と考えられる。よって、実際の消費量に比べて過大評価されていると推定されるのに対し、この下の段ではイヌの食害は考えられず、実際に人間の食事用に準備された食材の残滓であったと考えられる。

遺構別に出土量を概観すると、六十一番木門調査区の素掘井戸（SE3）の埋土（慶長後半～寛永頃）から出土したものが総計590点、全体の75.3パーセントと最も多く、同調査区V-7トレンチb面～a面間造成土（慶長後半～元和頃）のものが27点で3.4パーセント、Dの段南東郭内調査区のVI-4トレンチSK51（幕末）から出土したものが66点で8.4パーセント、油槽の捨台埋土（幕末～明治初）から出土したものが101点で12.7パーセントを占める。大多数を占めるSE3のものが江戸前半、特に17世紀第一四半期と限定できるので、特に江戸前半の上流武士階級の食生活を知る上では良好な資料といえるだろう。以下に概要を述べる。

3. 出土した動物遺存体の種類

A. 頭足類

イカ

コウイカ類の甲が、SE 3とSK51で出土した。イカにはモンゴイカなどの堅い甲を持つ種類と、スルメイカなどの甲を持たない種類がある。甲とは、外套の背側の筋肉内部の堅い石灰質のことと、舟とも呼ばれる。古代人がイカを食べたことを証明することができるには、コウイカ類の持つ甲の出土によってのみ他の種類は証明できない。イカの遺跡からの出土例は、縄文貝塚を中心に現在までのところ63遺跡を数え、青森県・寺貝塚から沖縄県北原貝塚まで全国にひろがる。(検索については、総合研究大学院大学で公開中の貝塚データベースによる。アドレスは、次の通りである。

[<http://koko.soken.ac.jp/groups/kaizuka/index.html>]

B. 魚類

エイ類

毒を持つ尾棘がSE 3から出土した。尾棘を持つエイには、トビエイ属、アカエイ属などがあり、1個体あたりに尾の付け根に近いあたりに1~数本の棘を持つ。縄文人は、この毒針を織に利用して狩猟、漁労に利用したことが貝塚出土の歯骨や、太平洋各地に残る民族例でわかる^⑨。現代では漁師が刺されるのを防ぐために、船の上で捕獲するとすぐに尾を切り落とすが、江戸時代の漁師はそのまま傷つけないようにして、城内に搬入していたようである。

アナゴ

特徴ある椎骨が2点、SE 3から出土した。アナゴも瀬戸内、ひいては西日本で好まれる魚種である。

ハモ

SE 3、SK51から主上顎、歯骨、前上顎-前鋏骨板が出土しているが量は多くない。瀬戸内の夏の風物詩的な魚種である。草戸千軒町からは、側頭部に目釘を打った痕跡を持つハモが出土している。痕跡としては残っていないが本例も目釘を打って3枚におろして骨切りをして賞味されたものであろう^⑩。

コノシロ

茨城、千葉、東京、神奈川各県の縄文貝塚からの出土が報じられているが、西日本では数少ない。コノシロはニシン亜目というグループに含まれて、そのグループには、マイワシ、コノシロ、サッパなどが含まれ、頭蓋骨系の骨格は脆弱ではほとんど遺跡では残らない。椎骨では同定が困難であるが、本例はそうした類似種の現生骨格標本と比較してもっとも類似性の高いコノシロと判断した。

コイ科

コイとフナを確認したが、SE 3に破片数22点と集中して出土している。コイは俎板のコイの喻えや、竜門の鯉や滝登りなどの故事により、精神的に武士階級に珍重された魚種である。実際にはマダラの方が好まれたであろうことは、前回の本丸中の段での饗宴のメニューにもコイが少なかったことからうかがえる。コイ科は咽頭骨と背・臀鰭棘に特徴があり、特に咽頭骨の形態で種までの同定が可能である。本遺跡でもコイとフナ属の薄い歯骨、前鰓蓋骨や鰭棘などが出土している。

ナマズ

S E 3 から擬鎖骨 1 点のみが出土した。ナマズの身は淡泊で癖がなく、見かけよりも美味で好まれたのであろう。

マダラ

日本海では山陰、太平洋では本州中部以北に分布する魚種であり、当時も瀬戸内には生息していなかったであろう。中世の草戸千軒町遺跡（福山市）では出土していないが、江戸初期の大坂の魚市場跡からの出土が報じられている^⑨。草戸千軒町遺跡から出土した中世のサケ^⑩と並んで、瀬戸内に寒流の魚類が流通していたことの一つの証拠である。

フサカサゴ科

メバル、カサゴ、ソイなどを含む良く知られたグループであるが、多種にわたる上、それぞれの部位が類似しているため種の判定は容易ではない。瀬戸内でもふつうに岩礁に生息する魚種である。

コチ

砂泥性の浅い海に多く、平べったい形をした魚種である。瀬戸内でも好まれる。コチには、特徴のある棘を持つ前鰓蓋骨や歯骨などがあり、椎骨もコチとしての特徴があり、同定は比較的容易である。

スズキ

マダイに次いで多くの出土をみた。特に S E 3 ではマダイを凌ぐ出土量があった。スズキは現在でも初夏の高級魚として扱われ、身は白身で柔らかく、洗いにして賞味されることが多かった。沿岸性で未成熟のころは淡水域まで河川を遡ることがある。地方によってはセイゴ、フッコ、スズキと、それぞれ 1 年、 2 年、 3 年と大きさとともに名称の変わる出世魚の代表種である。出土した個体には大型のものから小型のものまで含まれるが、小型のものが多い。いずれの遺構からも出土し、上級武士の間でも好まれたことがわかる。特に、S E 3 では、マダイをしのぐ数量が出土している。S E 3 からは体長 40 センチを越える大型の個体が最小個体数で 4 個体、それと並んで明らかに体長 20 センチに満たないと思われる 1 年魚の個体も最小個体数で 9 個体がまとまって出土している。小型の個体は大きさもよくそろっていることから 10 匹前後を一時に投棄した可能性が高い。

ハタ科の一種

S K51 から角骨が出土しているだけである。スズキと並ぶ高級魚である。この種類には小型のものからクエ、アラといった体長 1 メートルを超えるものまである。出土したのは小型のものである。

シイラ

特有の形態をしたシイラの椎骨が 4 点、S E 3 から出土している。出土数は多くない。

クロダイ

前回の中の段では出土しなかったが、今回、S E 3 から出土している。前上顎、歯骨などに特徴があり、マダイ属と区別がつく。マダイと比較して少量ではあるが、当時の本丸でクロダイが食されていたことが明らかとなった。出土例は前上顎骨の左右が同一個体のもので、最大長が 31.2 ミリともう一例が 33.1 ミリを測る。手持ちの現生骨格標本のクロダイは、体長 35 センチ程度の成魚で 29 ミリを測り、おそらく体長 50 センチを越える大きな成魚であったろう。

マダイ

スズキと並んでこの岡山城本丸を代表する魚種である。どの調査区でも主体を占める種類である。中の段で出土したマダイは体長 30 ~ 40 センチ位の小型のマダイが多く出土し、これは特別な食事メニュー

としてお頭付きを重要視した結果、マダイが小型化した可能性を考えたが、今回の出土例は、中の段に比べるとマダイの体長が大きい特徴がある。この場合は、大きなマダイを切り分けたと思われる。

今回の出土例では大型のものから小型のものまで認められるが、やはり中の段でみたように大型の個体に限って、頭蓋骨の各部分が、山刃包丁様の鋭利な刃物でぶつ切りにされている。特に前頭骨には正中線を真っ二つに割り、さらに幾つかに分割する調理痕が多く残されている。草戸千軒町でも多くの出土例があり、中世の調理包丁の多様化とともに成立した調理法ではないだろうか¹⁷⁾。これは兜割りと称する調理法で、マダイのアラの食べ方として現代でも行われている。小型のものとの調理方法の違いによるものと考えられる。

ボラ

大型の個体である。丸みのある主鰓蓋骨に特徴がある。

カマス科の一種

瀬戸内に多い魚種であるが、遺跡からの出土は多くない。

ミシマオコゼ科の一種

タチウオ

岸近くの表層魚であるが、遺跡からの出土は多くない。

サバ

瀬戸内でもかなりの漁獲量があったはずであるが、草戸千軒町遺跡でも出土量は多くない。頭蓋骨の部位が脆弱で残存しにくい可能性もある。小型の椎骨の中には、サバと思われる資料が多く含まれるが、他の魚種との区別が困難で、集計では「サバ型」と仮称した。

サワラ

瀬戸内海で多く獲れる魚種であり、寒鱈といって冬が最も美味であるという。

ヒラメ

カワハギ

特徴のある椎骨がSK51より3点出土しているが、他にはみられなかった。

C. 鳥類

鳥類はいずれもSE3から出土した。関節部を破損した四肢骨の破片も若干存在するが、量は多くない。

ガンカモ科

同定できた破片数17点と鳥類の中でもっとも多い。コガモクラスの小型のカモから、マガモ、ハクチョウといったガン、ハクチョウクラスの大型の種まで、多くの種類がある。出土例では、マガモ、カルガモクラスのカモ類が多い。SE3から出土したガンカモ科には、マガンクラスの大きさのガンが存在する。たとえば、手根中手骨は、両端部を欠損して計測することができないが、マガモよりもはるかに大きくヒシクイよりも小さい。これはサカツラガンを家禽化したガチョウの可能性もあるが、現生骨格標本と対照することができなかった。さらに同一個体の枕骨、尺骨もヒシクイよりも小型で、手根中手骨と同一個体のものであろう。

ハト

手根中手骨が1点出土している。現生のドバトの骨格に酷似する。

キジ科

キジ科の代表的な種類には、キジ、ヤマドリ、ウズラ、ニワトリなどがあるが、ウズラをのぞけば骨格からの区別は困難である。出土したキジ科は破片数13点とガンカモ科に次ぐ出土量を示す。この中には、小型のキジ科に属するウズラに相当する資料も存在する。ウズラは江戸時代に鳴き声を愛でるために飼うことが流行したが、その飼養の起源は明らかでない。さらに同じキジ科内には東南アジアに分布するヤケイ属を家禽化したニワトリがある。破片骨を比較した限りキジまたはヤマドリで矛盾がないが、手元のニワトリの現生骨格標本が西洋種のもので、近代化以前の在来日本種のニワトリの骨格標本と比較できなかったので、ニワトリが含まれているかどうかは今後の課題としたい。

D. 哺乳類

クマネズミ属の一種

S E 3 埋土から、下顎骨、脛・腓骨、大腿骨、切歯が出土している。いずれも完形で食用となつたものではない。御殿内の食料を荒らすのでネズミ退治で捕まつたものであろう。中の段でも相当量が出土していた。

ネコ

油槽の埋土から同一個体の下顎骨が完形で左右1点ずつ出土した。その他の部位は確認できなかつた。食用となつたものではなく、何らかの原因で死んだネコの死体が散乱した後に整地土に紛れ込んだと考えられよう。

ニホンジカ

S E 3 から肋骨の破片が1点出土している。本丸では、獸類の肉を食することが決して一般的でなかつたことが、出土したのがこの1点の肋骨であったことからもわかる。

4. 遺構ごとの特徴

A. 六十一雁木北方 S E 3 (慶長後半~寛永前半頃の廃絶時埋土)

本丸下の段で調査された区域の内、量・種類とも、最も多くの資料が確認できた場所である。江戸初期に郭の改造時にゴミ穴に転用され、一気に埋め立てられたことがわかる。ゴミの出所は、眼前の六十一雁木門を上った本丸御殿の食料残滓であったと考えられている。魚類を主体にし鳥類、哺乳類を少量含む。魚類の種類は豊富で瀬戸内で漁獲される多くの種を含むが、特に多いのはスズキとマダイである。スズキ、マダイともに大きさはさまざまである。スズキは特に大きなものと小さいものに2分される。クロダイも少量ではあるが2匹分出土している。このような種類と出土量からみると、大型のスズキ、マダイなどは単品として膳に盛られ、小型の多数の魚種は、雑魚の煮付けのようにして賞味されて廃棄されたとも思われる。

B. 六十一雁木北方 V - 7 トレンチ b 面~a 面間造成土 (慶長後半~寛永前半頃)

S E 3 に近い場所にあるにもかかわらず、確認された種類は少なく、マダイ主体の魚類のみが確認された。頭骨は確認されておらず、生活面重上げに伴う造成土に含まれたものであり、集中的な廃棄場所ではなかつたと考えられる。本丸内の別の場所に廃棄された動物骨が整地作業によって持ち込まれたものであろう。

C. 下の段南東郭内 S K51 (幕末のゴミ穴埋土)

マダイを主体とした魚類のみの出土である。数量的には S E 3 に及ばないが、種類構成が異なるので、料理の種類が異なっていたと考えられる。

D. 油樽（檜台の郭内側石垣を埋める幕末～明治初の造成土）

内堀際の油樽から、魚類ではスズキとマダイ、哺乳類ではネコが出土している。少量ではあるが、コチの椎骨も確認された。先にも述べたように、ネコが確認されたのはここだけである。解体痕は認められず、下顎のみの出土であるので、食用とされたのではなく、別のところの死体から外れた下顎が紛れ込んだ可能性が高い。

5. 考 索

当時の食材として、肉類よりも魚類が中心であったことが分かる。特に高級魚である、スズキやマダイが主に好まれた点が特徴である。スズキ、マダイの大きさは様々であり、大きなものだけが珍重されたのではなく、小さなものまで食されていたことが分かる。また、S E 3 の資料は本段御殿で生じた食料残滓と考えられ、遠方から搬入されたと考えられるマダラや、確認された豊富な魚類の種類からも、そこで暮らした人々の魚に対する華やかな嗜好が窺える。また、四季折々の旬の魚が含まれており、一年を通してさまざまな魚が食されていたことが分かる。

また、小型のマダイの前頭骨部分は完形のまま残存しているが、大型のマダイの前頭骨は、中心から鋭い刃物によって二つに切断されているものが多い。これは、小型のマダイと大型のものとでは、調理方法が異なったことを窺わせる資料である。

出土した魚類の骨に、火を受けたと考えられるものは確認できず、廻葉は焼却されることなく、そのままゴミ穴である土坑に投棄されたものと考えられる。また、調理方法としても、「焼く」よりも「煮る」方法が主にとられたことが分かる。

『池田家履歴記』慶長14年記事中に、岡山城本丸内で行われた正月の献立が残っており、その中の汁の献立が「鮓めを入」とあり、さらに「さしみ鯉」がある。S E 3 からも鯉と鰐の両方が出土しており、鯉、鰐に対する上流武家の思いを感じる。原田信男は、中世では鯉がもっとも重要視されていたのに対して、近世になると鰐がその地位に取って代わると主張する^⑨。その理由として『徒然草』の第118段の鯉の羹の話に、「鯉ばかりこそ（中略）やんごとなき魚なり」という一節を引き、さらに、室町時代末期の『七一番歌合』の五七番の包丁師が調理しようとする魚が鯉であることもその証拠としている。それが、近世の元禄期の『本朝食鏡』鱗部の項に「本邦鱗中之長」とあり、さらに『料理物語』の巻首が、鰐の調理法から始まることを引く。

岡山城二の丸から出土した動物遺存体について報告した富岡直人は、哺乳類について、イノシシ、ブタ、ウシ、ノウサギ、タヌキ、イヌ、オオカミ、アナグマなどが出土し、その多くに解体痕を観察していることから、これらが鷹の餌、もしくは人の食用になったことを論証している^⑩。しかし発掘区の近辺は、承応3年（1654）の大洪水以前には、大手門をすぐ入った重要な場所で、家老屋敷、上流武士の居住区であったとされており、屋敷内で鷹の餌を調理したと考えるよりも、屋敷内の住人の食料であったと考えた方が理解しやすいであろう。塙本学は江戸時代の下級武士には、犬喰いの風習が広がっており、徳川綱吉の一連の生類憐れみの令も、実際には見苦しい犬喰いの風習をやめさせることが一つの目的であったと考える^⑪。明石城の家老屋敷においては、裏庭の溝や土坑に解体して調

理したイヌ、ウシ、イノシシ（ブタ？）などを、江戸時代前期から幕末に至るまで投棄しており、上級の武家屋敷においてすら動物を食用にすることは珍しくなかったことを示しているだろう¹⁰⁾。

このように考えると、岡山城本丸から出土する食料残滓に、イヌを初めとする哺乳類が非常に少ないことは、この本丸における食事の性格を良く表しているだろう。

注

- (1) 松井章1997 「岡山城本丸中の段出土の動物遺存体」『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』岡山市教育委員会 pp.323-331
- (2) 富岡直人1998 「岡山城二の丸跡出土の動物遺存体」『岡山城二の丸跡』中国電力内山下変電所建設事業埋蔵文化財調査委員会 pp.136-163
- (3) 石川元助1971 「『毒』の考古学」『考古学ジャーナル』第56号 ニューサイエンス社 pp.12-17
- (4) 松井章1988 「中世の水産資源」『草戸千軒』第191号 草戸千軒町遺跡調査研究所 pp.5-7
- (5) 久保和士1999 「近世大阪における水産物の流通と消費」『動物と人間の考古学』真陽社 pp.137-179 (掲録)
- (6) 松井章1988 「中世の塩鉢」『草戸千軒』第180号、草戸千軒町遺跡調査研究所 pp.5-6
- (7) 松井章1988 「中世のマダイ魚」『草戸千軒』第182号草戸千軒町遺跡調査研究所 pp.6-7
- (8) 原田信男1989 『江戸の料理史』中公新書 pp.19-21
- (9) 前掲注 2 参
- (10) 塚本学1983 『生類をめぐる政治』平凡社
- (11) 松井章・内山純蔵1992 「明石城武家屋敷出土の動物遺存体」『明石市明石城武家屋敷跡－山陽電鉄線立体交差事業に伴う発掘調査報告書』兵庫県教育委員会 pp.132-140

岡山城本丸下の段出土動物遺存体種名表

頭足綱 Class CEPHALOPODA

コウイカ属の一種 *Sepia sp.*

軟骨魚綱 Class CHONDRICHTHYES

エモイの一種

Order Rajiformes Fam. et gen.indet.

硬骨魚綱 Class OSTEICHTHYES

アナゴ科 Family Congridae

マアナゴ *Conger myriaster*

ハモ科 Family Muraenesocidae

ハモ属の一種 *Muraenesocidae sp.*

コノシロ科の一種

Dorosomatidae gen. et sp. indet.

コイ科 Cyprinidae

コイ *Cyprinus carpio*フナ属の一種 *Carassius sp.*

ナマズ科 Siluridae

ナマズ *Silurus asotus*

タラ科 Gadidae

マダラ *Gadus macrocephalus*

ボラ科 Mugilidae

ボラ *Mugil cephalus*

カマス科の一種

Sphyrnidae gen. et sp. indet.

スズキ科 Percichthyidae

スズキ *Lateolabrax japonicus*

シイラ科の一種

Coryphaenidae gen. et sp. indet.

サバ科の一種

Scombridae gen. et sp. indet.

タチウオ科の一種

Trichiuridae gen. et sp. indet.

ミシマオコゼ科の一種

Uranoscopidae gen. et sp. indet.

ハクメイ科

Serranidae gen. et sp. indet.

タイ科 Sparidae

マダイ *Pagrus major*クロダイ *Acanthopagrus schlegeli*

フサカサゴ科の一種

Scorpaenidae gen. et sp. indet.

コチ科 Platyccephalidae

マゴチ *Platyccephalus sp.*

ヒラメ科 Paralichthyidae

ヒラメ *Paralichthys olivaceus*

カワハギ科の一種

Monacanthidae gen. et sp. indet.

鳥綱 Class AVES

ガシラモ科 Anatidae

カモ類 *Anas spp.*

ハト科の一種 Columbidae

Columbidae gen. et sp. indet.

キジ科 Phasianidae

キジ *Phasianus colchicus*

哺乳綱 Class MAMMALIA

ネズミ科 Muridae

タヌキズミ属の一種

Ratio sp.

ネコ科 Felidae

イエネコ *Felis calus*

シカ科 Cervidae

ニホンジカ *Cervus nippon*

魚類

岡山城本丸跡出土動物遺存体同定表

	SE 3	土上顎骨	前上顎骨	両 左 右	舟 骨	角 骨	方 骨	前 齶 蓋 骨	士 絶 蓋 骨	前 頭 後 頭 骨	鰓 骨 椎 骨	舟 石	口 蓋 骨	咽 頭 骨	破 片 数 計
ア ナ ゴ				左 右	左 右	左 右	左 右	左 右	左 右	左 右		2			2
ハ モ	1				2	1				1	1				6
コ ノ シ ロ															
コ ラ イ				2	2				1	2					3
フ ナ										1					4
ナ マ ズ															0
マ ダ ラ	1	1													2
フサカサゴ科				1	1	1	1	1	2	2	1	3	1	1	14
コ チ		3	1	3	2						1	1			13
ス ミ キ	17	22	26	19	19	17	15	13	5	5	10	26	7	10	224
ハ タ															0
シ イ ラ															4
クロダイ		2	2	1	2		1								9
マ ダイ	16	14	33	15	13	19	12	15	7	7	4	4	9	4	201
ボ ラ	1	1				1			1	1	6	4			15
オ コ ゼ	1														1
カ マ ス															1
タ チ ウ オ															0
サ バ															3
サ ワ ラ					1										1
ヒ ラ メ															0
カ ワ ハ ギ															0

※その他の、コウイカ：甲6、エイ：毒針1、ハモ：前上顎骨・前歯骨板2枚、后頭骨1枚、コイ科：尾鱗2枚、

ナマズ：腹鰓骨右1枚、スズキ：尾部棘状骨4枚、カワハギ：間神經棘1枚確認された。

514

V-7トレチ	土上顎骨	前上顎骨	角 骨	角 骨	方 骨	前 齶 蓋 骨	士 絶 蓋 骨	前 頭 後 頭 骨	鰓 骨 椎 骨	舟 石	口 蓋 骨	咽 頭 骨	破 片 数 計		
ア ナ ゴ															0
ハ モ															0
コ ノ シ ロ															0
コ ラ イ															1
フ ナ															0
ナ マ ズ															0
マ ダ ラ															0
フサカサゴ科	1			4		1	2								8
コ チ				2											0
ス ミ キ										1	1				4
ハ タ															0
シ イ ラ															0
クロダイ	1	2	1	1	1	2	1	1						0	
マ ダイ	1	2	1	1	1	2	1	1						12	
ボ ラ															0
オ コ ゼ															0
カ マ ス															0
タ チ ウ オ					2										2
サ バ															0
サ ワ ラ															0
ヒ ラ メ															0
カ ワ ハ ギ															0

**椎骨の横の印は、◎：「非常に多く確認された」、○：「比較的多く確認された」ことを示す。

27

岡山城本丸下の段出土の動物遺存体

	SK51		上顎骨 前上顎骨 齒 角骨 方骨 前頸蓋骨 上頸蓋骨 前頭後頭動骨椎骨 耳 石 口蓋骨 咽頭骨 破片数計																		
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	
アナゴ																					0
ハモ				1																	1
コノシロ				1																	5
コノイ											1										2
フナ																					0
ナマズ																					0
マダラ																					0
フサカサゴ科				1	3	1				1											6
コチ																					0
スズキ		1	1			1				1	1										5
ハタ					2	1															3
シイラ																					0
クロダイ																					0
マダイ	2	3	3	1	2	5	1				1			5	2		○				25
ボラ																					0
オコゼ																					0
カマス																					0
タチウオ																					0
サバ																					0
ヒラメ							1	1										8			10
カワハギ																		1			1
その他、コワイカ: 単2、カワハギ: 間神經鱗3が確認された。																					61

	油		上顎骨 前上顎骨 齒 角骨 方骨 前頸蓋骨 上頸蓋骨 前頭後頭動骨椎骨 耳 石 口蓋骨 咽頭骨 破片数計																		
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	
アナゴ																					0
ハモ																					0
コノシロ																					0
コノイ																					0
フナ																					0
ナマズ																					0
マダラ																					0
フサカサゴ科																					0
コチ																					4
スズキ	1	4		7	5				3	3							4		1		24
ハタ																					0
シイラ																					0
クロダイ																					0
マダイ	1	3	10	4	8	13	5	2	2	2	3	1	7	4		○	5	1			71
ボラ																					0
オコゼ																					0
カマス																					0
タチウオ																					0
サバ																					0
ヒラメ																					0
カワハギ																					0
合計																					99

鳥類

	SE3		鳥口骨 前腕骨 上腕骨 雉骨 方骨 大腿骨 肋骨 胸椎骨 骨頭骨 計																		
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	
ガンカモ科	1	1	2	2	2	2	1	2	2	1	1	2									17
ハト																					2
キジ	1	1	2	2	1						1	1	1	1	1	2	13				
ウズラ		2																			2
合計																					34

哺乳類

	SE3		下頬骨 脊・鰓骨 大腿骨 肋骨 切歯 計																		
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	
シカ																					1
ネズミ	5	3	1	2	2	2			6	21											22
合計																					2
ネコ	1	1																			2

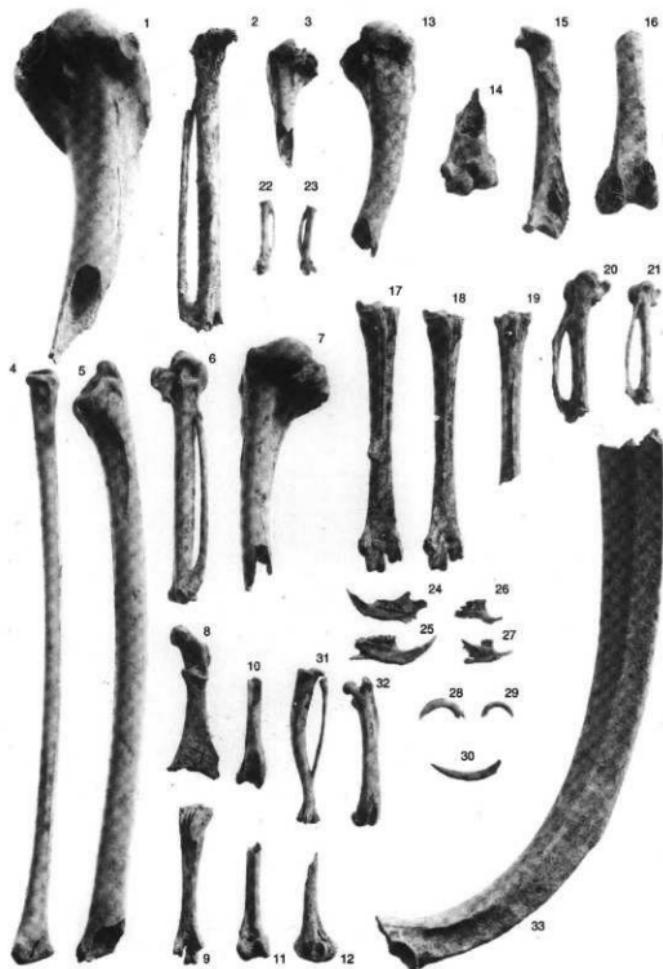


Plate 1

- | | | | | | | |
|-----------------|-----------|-----------------------|-----------|-------------------------------|----------|----------|
| 1カモ科：上腕骨 | 2カモ科：腕掌骨 | 3カモ科：上腕骨 | 4カモ科：橈骨 | 5カモ科：尺骨 | 6カモ科：腕掌骨 | 7カモ科：上腕骨 |
| 8カモ科：鳥口骨 | 9カモ科：跗蹠骨 | 10カモ科：大脛骨 | 11カモ科：大脛骨 | 12カモ科：大脛骨 | 13キジ：上腕骨 | 14キジ：上腕骨 |
| 15キジ：鳥口骨 | 16キジ：大脛骨 | 17キジ：跗蹠骨 | 18キジ：跗蹠骨 | 19キジ：跗蹠骨 | 20キジ：腕掌骨 | 21ハト：腕掌骨 |
| 22ウズミ：腕掌骨 | 23ウズミ：腕掌骨 | 24クマネズミの一種：下顎骨(1) | | 25クマネズミの一種：下顎骨(1, M1, M2, M3) | | |
| 26クマネズミの一種：上頬切歯 | | 27クマネズミの一種：下顎骨(1, M1) | | 28クマネズミの一種：上頬切歯 | | |
| 29クマネズミの一種：上頬切歯 | | 30クマネズミの一種：下頬切歯 | | 31クマネズミの一種：脛腓骨 | | |
| 32クマネズミの一種：大脛骨 | | 33ニホンジカ：膝骨 | | | | |



Plate 2

- 1マダイ：歯上顎骨 2マダイ：前上顎骨 3マダイ：前上顎骨 4マダイ：前上顎骨 5マダイ：歯上顎骨 6マダイ：歯上顎骨 7マダイ：歯上顎骨
 8マダイ：歯上顎骨 9マダイ：歯骨 10マダイ：歯骨 11マダイ：歯骨 12マダイ：歯骨 13マダイ：主上顎骨 14マダイ：主上顎骨
 15マダイ：主上顎骨 16マダイ：主上顎骨 17マダイ：主上顎骨 18マダイ：主上顎骨 19マダイ：主上顎骨 20マダイ：方骨 21マダイ：方骨
 22マダイ：方骨 23マダイ：角骨 24マダイ：角骨 25マダイ：角骨 26マダイ：角骨 27マダイ：椎骨 28マダイ：椎骨
 29マダイ：椎骨 30マダイ：椎骨 31マダイ：椎骨 32マダイ：椎骨 33マダイ：椎骨 34マダイ：椎骨 35マダイ：椎骨
 36マダイ：椎骨



Plate 3

- | | | | | | | |
|-----------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|
| 1マダイ：前頸骨 | 2マダイ：前頸骨 | 3マダイ：前頸骨 | 4マダイ：前頸骨 | 5マダイ：前頸骨 | 6マダイ：前頸骨 | 7マダイ：前頸骨 |
| 8マダイ：前頸骨 | 9マダイ：前頸骨 | 10マダイ：前頸骨 | 11マダイ：前頸骨 | 12マダイ：前頸骨 | 13マダイ：前頸骨 | 14マダイ：前頸骨 |
| 15マダイ：前頸骨 | 16マダイ：上後頸骨 | 17マダイ：上後頸骨 | 18マダイ：上後頸骨 | 19マダイ：前頸蓋骨 | 20マダイ：主頸蓋骨 | 21マダイ：主頸蓋骨 |

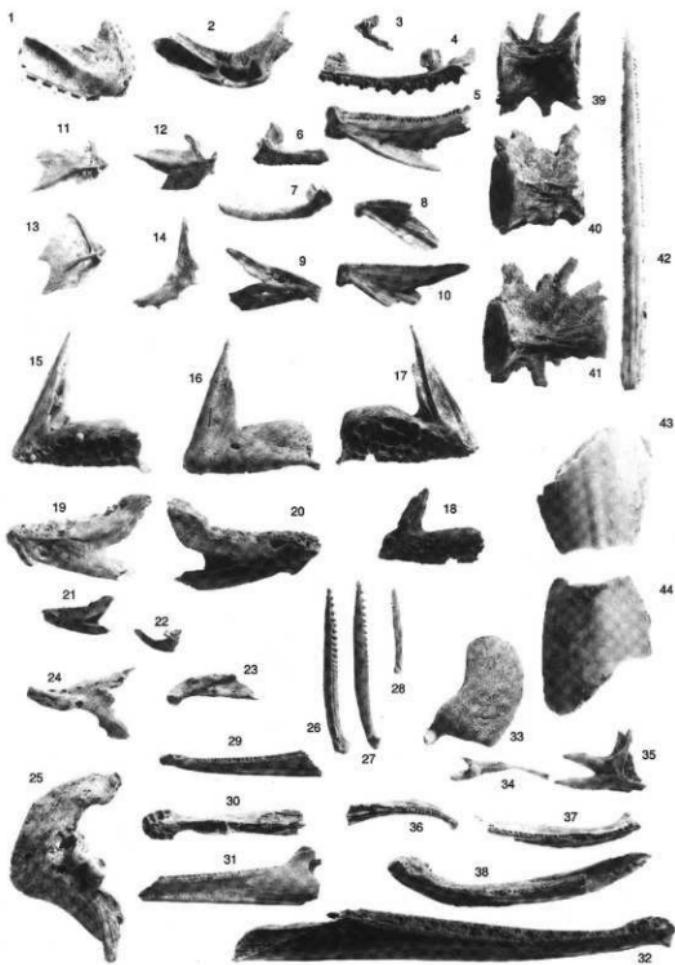


Plate 4

1 サワラ：頭上顎骨	2 ナマズ：擬椎骨	3 フサカサゴ科：前上顎骨	4 マグロ：前上顎骨	5 ハタ科：歯骨
6 フサカサゴ科：主上顎骨	7 コナ：主上顎骨	8 フサカサゴ科：歯骨	9 フサカサゴ科：歯骨	10 フサカサゴ科：歯骨
11 フサカサゴ科：主歯盤骨	12 フサカサゴ科：歯骨	13 フサカサゴ科：主歯盤骨	14 フサカサゴ科：前歯盤骨	15 ロダイ：前上顎骨
16 ロダイ：前上顎骨	17 クロダイ：前上顎骨	18 クロダイ：前上顎骨	19 クロダイ：歯骨	20 ロダイ：歯骨
21 ロダイ：歯骨	22 コイ科：頭顎骨	23 ナマズ：歯骨	24 コイ：歯骨	25 コイ：歯骨
25 コイ科：第二背筋鰓または第三背筋鰓	26 コイ科：第二行鰓鰓または第二背筋鰓	27 コイ科：第二行鰓鰓または第二背筋鰓	28 コイ科：第二背筋鰓または第三背筋鰓	29 コイ科：第二背筋鰓または第三背筋鰓
29 ハゼ：歯骨	30 ハモ：歯骨	31 ハモ：歯骨	32 ハモ：歯骨	33 ハモ：主歯盤骨
34 コチ：主上顎骨	35 コナ：前歯盤骨	36 コチ：歯骨	37 コチ：歯骨	38 コチ：歯骨
39 シイラ：椎骨	40 シイラ：椎骨	41 シイラ：椎骨	42 エイの一枚：尾鱗	43 ウイカの一握
44 コウイカの一握				

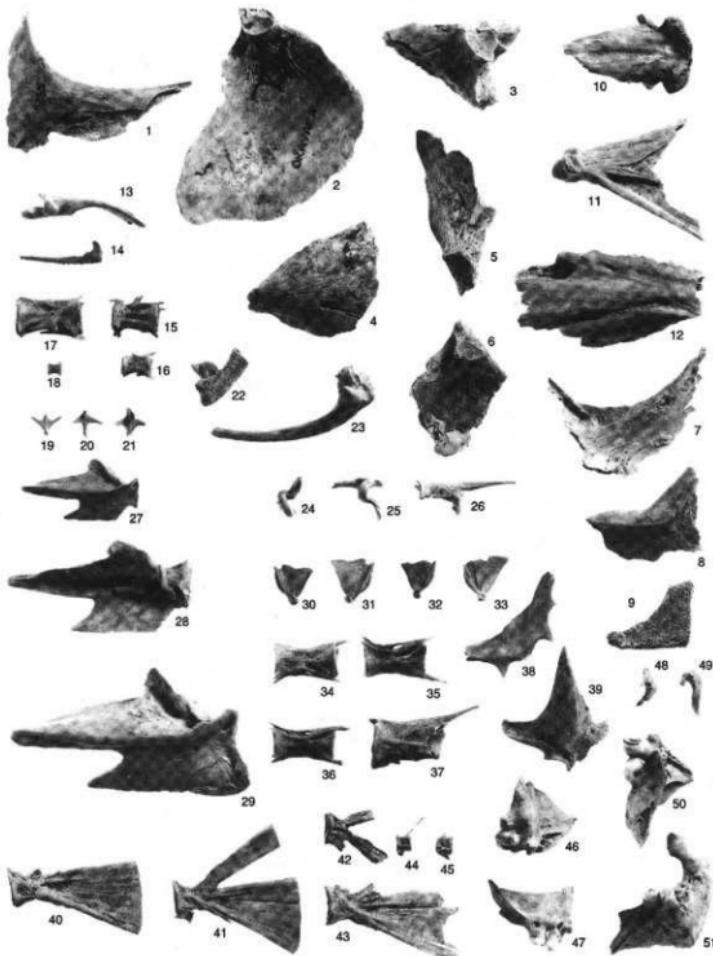


Plate 5

- | | | | | |
|-------------|-------------|---------------|------------|-------------|
| 1ボラ：前頸蓋骨 | 2ボラ：主頸蓋骨 | 3ボラ：主頸蓋骨 | 4ボラ：主頸蓋骨 | 5ボラ：主頸蓋骨 |
| 6ボラ：主頸蓋骨 | 7ボラ：前頸蓋骨 | 8ボラ：前頸蓋骨 | 9不明：主頸蓋骨？ | 10コナ：歯骨 |
| 11ラメ：角骨 | 12ヒラメ：鰓骨 | 13ミシマオコゼ：主頸蓋骨 | 14セバ：後上頸骨 | 15サバ：歯骨 |
| 16セバ：椎骨 | 17コナ：椎骨 | 18ニシン底口：椎骨 | 19カワハギ頭：頭骨 | 20カワハギ頭：頭骨 |
| 21カワハギ頭：頭骨 | 22コナ：前上頸骨 | 23マツラ：頭上頸骨 | 24コナ：主上頸骨 | 25コナ：主上頸骨 |
| 26コナ：椎骨 | 27ハタ科：角骨 | 28ハタ科：角骨 | 29ハタ科：角骨 | 30フサカサゴ科：方骨 |
| 31フサカサゴ科：方骨 | 32フサカサゴ科：方骨 | 33フサカサゴ科：方骨 | 34コナ：椎骨 | 35コナ：椎骨 |
| 36コナ：椎骨 | 37コナ：椎骨 | 38フサカサゴ科：前頸蓋骨 | 39クロダイ：角骨 | 40スズキ：頭部椎状骨 |
| 41スズキ：尾部椎状骨 | 42スズキ：尾部椎状骨 | 43スズキ：尾部椎状骨 | 44アナゴ：椎骨 | 45アナゴ：椎骨 |
| 46コイ：頭顱骨 | 47コイ：頭顱骨 | 48コイ：頭顱骨 | 49コイ：頭顱骨 | 50コイ：頭顱骨 |
| 51コイ：頭顱骨 | | | | |



Plate 6

- | | | | | | | |
|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|
| 1スズキ：鰓骨 | 2スズキ：前鰓蓋骨 | 3スズキ：前鰓蓋骨 | 4スズキ：前鰓蓋骨 | 5スズキ：前鰓蓋骨 | 6スズキ：前鰓蓋骨 | 7スズキ：前鰓蓋骨 |
| 8スズキ：前鰓蓋骨 | 9スズキ：前鰓蓋骨 | 10スズキ：主鰓蓋骨 | 11スズキ：主鰓蓋骨 | 12スズキ：主鰓蓋骨 | 13スズキ：主鰓蓋骨 | 14スズキ：主鰓蓋骨 |
| 15スズキ：主上顎骨 | 16スズキ：前上顎骨 | 17スズキ：方骨 | 18スズキ：方骨 | 19スズキ：方骨 | 20スズキ：主上顎骨 | 21スズキ：主上顎骨 |
| 22スズキ：前上顎骨 | 23スズキ：主上顎骨 | 24スズキ：齒骨 | 25スズキ：齒骨 | 26スズキ：主上顎骨 | 27スズキ：主上顎骨 | 28スズキ：角骨 |
| 29スズキ：角骨 | 30スズキ：角骨 | 31スズキ：角骨 | 32スズキ：角骨 | 33スズキ：角骨 | 34スズキ：齒骨 | 35スズキ：齒骨 |
| 36スズキ：齒骨 | 37スズキ：齒骨 | | | | | |

調理技術的にみた S E 3 出土の貝類

岡 嶋 隆 司（メルパルク岡山調理部門）

1. はじめに

六十一年木門北方の素掘り井戸（SE3）が廃絶したのは慶長年間後半から寛永年間であるが、その際に大量のゴミが投棄された。内には、本段御殿の台所に関わるとみられる大量の食物残渣が含まれ、大名家に関わる食生活を考える上で貴重な資料といえる。ここでは、出土した貝類について調理技術的視点から記述する。貝の大きさの基準や名称、文字については、日本料理用語を使用する。

2. 貝類の構成と観察（表1）

出土品として計数できた貝殻は、7種類、1271個体である（貝杓子2点は除く）。蛤は、全体の80.7%であり、次に多い栄螺の9.4%をはるかに凌ぐ多さである。

① 蛤（アカガイ）

2個体が出土した。1個は長さ10.6cmであり、料理するには最も適した大きさである。細部まで観察したが、焼けた痕跡などは見られない。したがって貝焼き以外の料理としか言えない。

③ 蛤（アワビ）

42個体が出土した。殻長から大・中・小に分けたのが表2である。全体に大きな物が選ばれたと考えられる。また、焼けた痕跡をもつ物があり、貝焼きをしていたことは確実である。

③ 栄螺（サザエ）

119個体が出土している。並焼きに適したサイズであり、焼けた痕跡をもつ物がある。特筆されるのは、表3のように、瀬戸内海では普通には見られない角を持った物が含まれることである。全体の28%であるが当時の食材の流通を考える上で貴重な資料である。蓋は29個出土している。大きさは、径3~4cmの物ばかりである。

④ 蜦（シジミ）

4個体だけである。本来はもっとあったのに、発掘時に取りこぼされた可能性がある。大きさは、2.2~4.5cmである。おそらく汁物に使われたのであろう。

⑤ 半螺（ニシ）

67個体出土している。この貝にも焼けた痕跡をもつ物があり、貝焼きにしたことは確実である。表4は、大・小に分けてみたものであるが、比率のうえで大小の差はさほどでない。貝焼きに適している殻長10cm以上の物が選ばれた為とも考えられる。

⑥ 伏老貝（ハイガイ）

11個体出土している。この貝は、一度煮抜いて身を取り出し料理することが一般的である。

⑦ 蛤（ハマグリ）

片殻で数えて2052点、1026個体ぶん出土している。表5は、蛤の大きさを大・中・小に分けたものであるが、大とした物の中には、焼けた痕跡をもつ物があり焼き蛤用、小とした物は、吸物（？）として用いたものと考えられる。また、中としたのは焼き蛤、吸物どちらでも使える大き

さであると言う意味で分けてみたのであるが、観察の結果焼けた痕跡が有る物が幾つか認められた。このことから中以上の大きさの物は、焼き蛤用と考えておきたい。

3. 出土した貝の料理法について

出土資料では、料理法を示す痕跡として、焼けた痕しか見い出せなかった。以下では、各資料に関する料理法を慶長以前の料理書から紹介したい。参考とした料理書は、明応六（1497）年の『山内料理書』⁽¹⁾（以下A）と天正元（1573）年の『りうりの書』⁽²⁾（以下B）である。

① 蛤（アカガイ）

A：「赤貝 青芥子酢⁽³⁾をもって和える」。

B：「あかがい ほんき（北寄貝）ほどは酒と下地をくわえて料理し殻盛りにすべし 大方は白染め付け（器）に盛りたるもよし これは貝に盛り候とも亀足⁽⁴⁾ あるべからず台はありてしかるべきものなり」。

② 姥（アワビ）

A：「姥 水を掛」（5）「蟹姥 くるみつけ 常はくるみあへといふ」「水姥（みずがい）塩あわび にても」「姥黒身和えとは腸（わた）の黒身をたゝきあゆ酢⁽⁵⁾ 和え也」

B：「あわびいゑ（殻）盛りの事 あわびに蕊⁽⁶⁾を付けて浪を五色の紙にて丸くして七も九も付きて盛る事もある かなめ（包丁目）を付けて盛ることもありそれは膳夫⁽⁷⁾の手柄しだいたるべし 此には刺亀足あるべからず也」

③ 栄螺（サザエ） 辛螺（ニシ）

A：「辛螺亀足する」「にし壺入 平炉にすべて又十器（かわらけ）をわりて」

B：「にし ざさえはいゑ盛りにすべし その時は亀足を刺し にしには蓋へ蕊を付るなりにしの台は「とつく」「てまい」とていろいろあり いかにも金銀のをしけ⁽⁸⁾つかうすべき物也 これら膳夫の手柄たるべし」「にしの巻煎と申はにしの身を抜きてよく洗いて細かに作りて（切って）よき酒へすまし（汁）を少し加えてにしを煮て さて取り上げてにしのいゑ（殻）に盛りて亀足を付けやがてにしの蓋にも蕊を付てにしに台をしつし（作って）候てなしてさて出すべし 是をにしのつぱいりとは申也 口伝之在」

④ 蛤（ハマグリ）

A：「蛤からながらゆでゝもるべし」

B：「蛤を汁にする時は貝ながらよきすまし（汁）をもってりうり（料理）申也 すましを薄くして酒をくはひて（加えて）蛤を入れりうり そのまゝ殻ごとかんもり（こん盛り）などに盛りて出す也」

4. 結語

S E 3 出土の貝殻に示される食材は、本膳料理⁽⁹⁾の一品として膳の上を飾ったものである。貝の種類は、同じ岡山城の本丸中の段の出土資料⁽¹⁰⁾と近似するが、以下の点は注目される。

まず、栄螺に有角のものが含まれていることがある。有角栄螺は中の段では上層、下層とも出土していない。この有角栄螺は、波が穏やかな瀬戸内海では普通には採れなかつたはずで、いわゆる「地

物」ではなく「送物」ということになる。このことは、食材としての貝の流通が広域に渡っていたことを示すにはかならないが、榮螺は「地物」でも貯える条件にあったことを考え合わせと、「贈り物」や「儀礼的」などの特別な意味でもたらされた可能性も考えられる。

また、鮑についても同様に考えて良さそうである。享保二十（1735）年から元文元（1736）年にかけて編纂された『備前備中国之内領内産物帳』⁰¹は、領内の産物をまとめたものであるがこの中には、他の貝の記載はあるのに、鮑については書かれていません。つまり、当地方では、鮑は多く採れなかっただと考えられる⁰²。各時代にわたる岡山県下の遺跡で、鮑が良く出土するのは城跡であり、岡山城からは最も多く出土している。「儀式」や「格式」を伴う料理に必要な食材として、他地域から持ち込まれたと考えられる。

蛤については、殻の大きさから一般的に「大型は焼き蛤、小型は吸物」と考えられている。しかし、『山内料理書』には「蛤 蛤ながら茹でて盛るべし」と記載されており、特に小型の蛤に関しては一概に判断すべきでないと考える。⁰³

次ぎに、榮螺と辛螺の組合せについて述べてみたい。日本料理では、一つの献立の中で食材の重複使用や類似食材使用など通常では行われない。また、江戸時代料理書の献立を見ても同じである。このことから榮螺と辛螺は別々の献立に使用された可能性がある。ただし、鮑は、駆斗鮑など縁起物であるから、事情が異なると考えて良い。

以上、出土した貝類について料理人の眼を通して述べてみた。今後も資料と同時代の料理書を対比し古い時代の料理について考えて行きたい。

注

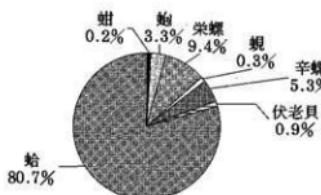
- (1) 倉林正次編『山内料理書』『原典現代訳証 日本料理秘伝集成』第十八巻 1985年 同朋社
- (2) 「りうりの書」注(1)に同じ。
- (3) 辛子葉の葉を搗り加え緑色にした合わせ酢のこと。
- (4) きそく。殻を持って食べると手が汚れない様、または、熱くない様に使う紙。
- (5) 水貝のこと。蛤を小角に切り、薄い塩水に入れ、そのまま食する古来からの料理。
- (6) 青蓼を使った酢である。
- (7) しべ。端の熱りのこと。
- (8) ぜんぶ。料理人のこと。
- (9) 押し形のこと。
- 01 室町時代に成立した儀式料理。本米は、貴族や大名のもてなし料理であった。本膳、二の膳、三の膳からなるのが基本で各膳に汁物が付く。後の懐石、会席料理の原型。
- 02 岡山市教育委員会『史跡岡山城跡本丸中の段堀発掘調査報告』1997年
- 03 原典は、岡山大学附属図書館池田家文庫蔵。盛永俊太郎・安田健編『享保元文膳国産物帳集成』第1巻1987年 科学書院 所収
- 04 現代の瀬戸内海では、兵庫県家島群島、香川県小豆島南東部、岡山県笠岡諸島六島において生息が確認されている。岡山県水産試験場栽培漁業センター杉野博之氏の御教示による。
- 05 筆者も注(1)文献では小型の蛤を「酒蒸し又は吸物」と考えたが、ここで訂正したい。

種類	個体数
蚶 (アカガイ)	2
鲍 (アワビ)	42
栄螺 (サザエ)	119
蜑 (シジミ)	4
辛螺 (ニシ)	67
伏老貝 (ハイガイ)	11
蛤 (ハマグリ)	1026
総 数	1271

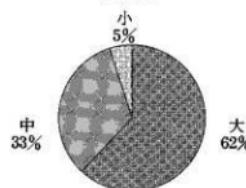
表1 S E 3 出土貝殻の種類と構成

大 (13~18cm)	26個
中 (10~12cm)	14個
小 (9cm以下)	2個

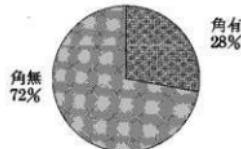
表2 鮑の殻長



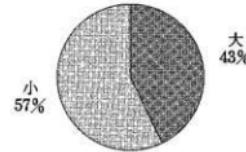
グラフ1



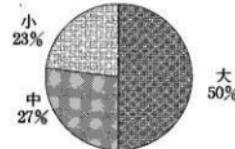
グラフ2



グラフ3



グラフ4



グラフ5

報告書抄録

ふりがな	しそきほぞんせいひじょうう しそきおかやまじょうせきほんまるしたのほんはくつちょううさほく
書名	史跡保存整備事業 史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告
編著者名	出宮徳尚・栗岡実
編集・発行機関	岡山市教育委員会（文化財課 岡山市埋蔵文化財センター）
所在地	〒700-8544 岡山市大供1-1-1 tel 086-803-1000
発行年月日	2001年3月31日

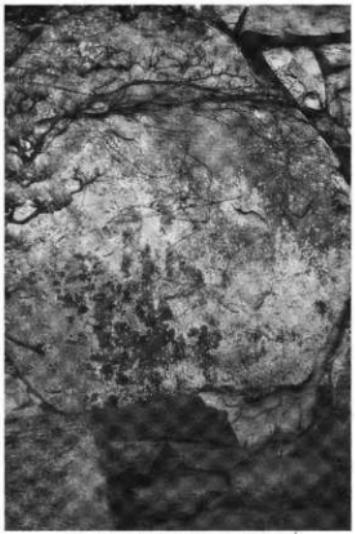
所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
岡山城跡 本丸下の段	岡山県岡山市 まるのうち 丸の内3-901 ほか	33201	-----	34 度 39 分 40 秒	133度 56 分 13 秒	1997.11.25 2000. 3.29	2480	国史跡 岡山 城跡の史跡保 存整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
岡山城跡 本丸下の段	城館	中世末 近世	石垣・櫓台 礎石・基礎 石組・井戸・ 石組溝	各種瓦 (含金積瓦) 陶磁器	• 江戸時代の絵図と一致する位置 と内容の櫓跡・城門・井戸など の遺構が遺存 • 江戸初期までの郭の変遷が判明			



1. 内下馬門



2. 内下馬門北側礎石



3. 内下馬門北側石壘の鏡石



4. 内下馬門北側石壘下の石組溝

図版 2



1. 太鼓橋の橋台西側



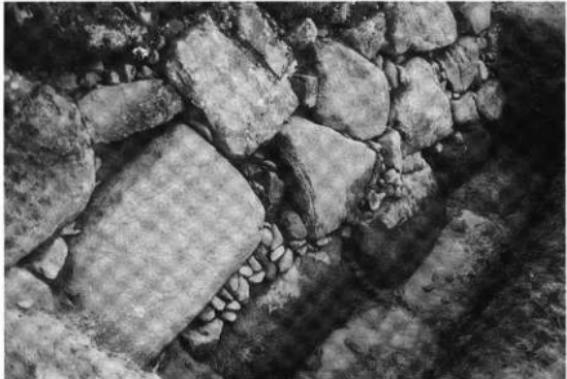
2. 鉄門下の本段石垣と
岩盤



3. 修復橋の橋台



1. 金蔵門



2. 大納戸櫓櫓台の
石垣基底

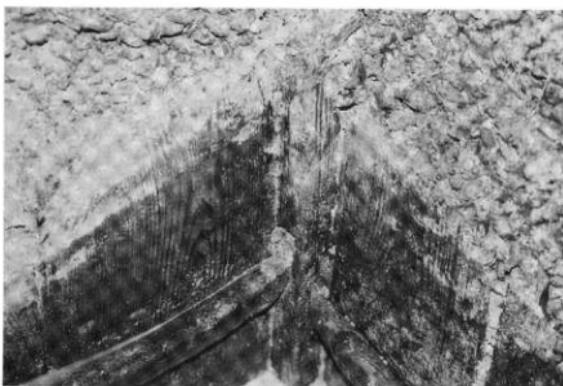


3. 大納戸櫓櫓台石垣下
の石組構

図版 4



1. 金蔵の石組



2. 金蔵周辺の下層井戸 2



3. 金蔵周辺の下層石組



1. 金蔵東側の石組溝



2. 金蔵東側の高石垣の入角



3. 伊部櫓檜台下の出角



4. 数寄方櫓檜台下の石組溝

図版 6



1. 油櫓の檜台



2. 油櫓の檜台内の埋没
石垣



3. 春屋南の石組井戸

1. 馬場口門の路面と
番所の石組



2. 馬場口門内の
石積み段



3. 馬場口門内の
番所の石組



図版 8



1. 天守台石垣の北西の出角



2. 天守台石垣の基部



3. 天守脇の外被石垣

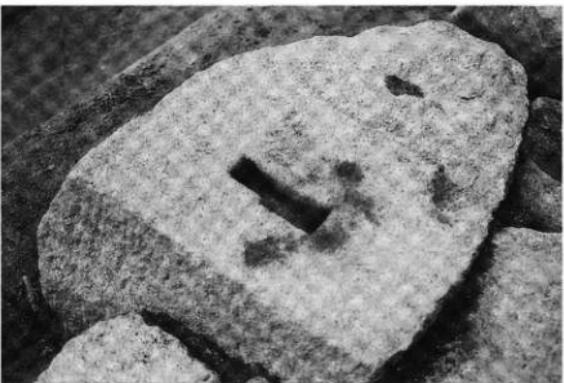


4. 外被石垣基部と石組 3

1. 六十一雁木下門の
上層構造



2. 六十一雁木下門の
上層礎石



3. 六十一雁木下門の
上層構造と下層構造

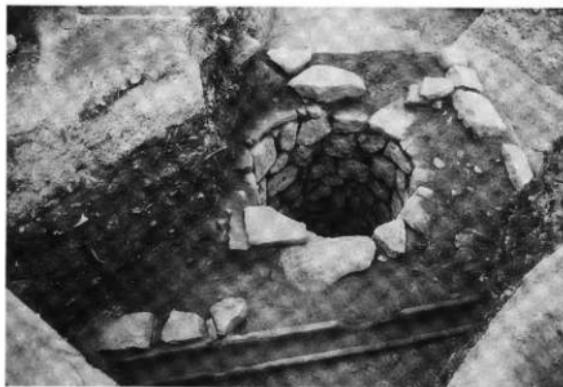




1. 六十一雁木脇石塀の
北東隅



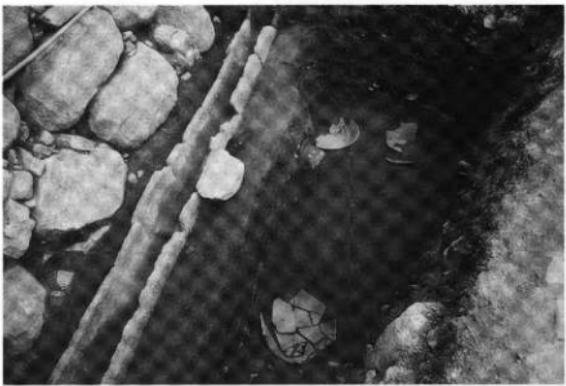
2. 六十一雁木脇石塀の
付根



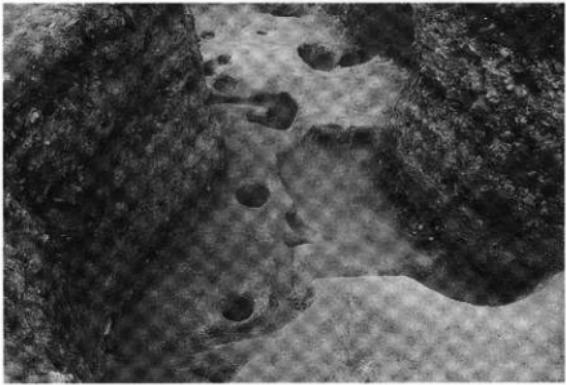
3. 雁木下門北方の上層
石組井戸



1. 雁木下門北方
多門櫓の郭内側



2. 雁木下門北方の本段
石垣と上層石組溝・
下層据え甕



3. 雁木下門北方の
下層竪穴

図版12



1. 坂下門内の階段



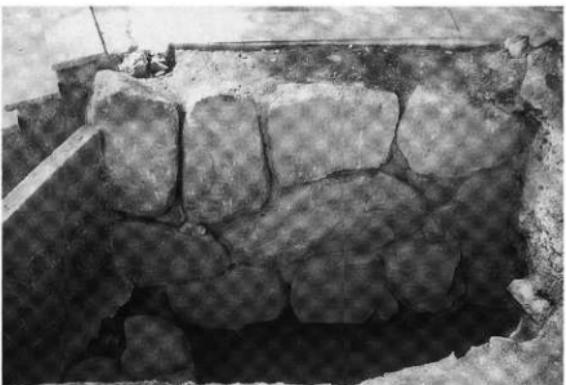
2. 坂下門の本段側門壁



3. 坂下門脇の本段石垣と腰巻石垣



4. 本段高石垣の南東隅と露岩



1. 本段南東高石垣の
石壘前端



2. 下の段南東郭内の
石組



3. 下の段南東郭内の
上層石組と下層石組